

ISBN 978-4-906888-23-8

青森市

合子沢松森(4)遺跡

—2008・2009・2010年度発掘調査報告書—

羽生淳子・伊藤由美子・安達香織 編

2016年3月



青森市
合子沢松森（4）遺跡

—2008・2009・2010年度発掘調査報告書—

羽生淳子・伊藤由美子・安達香織 編

2016年3月

例言

1. 本書は、青森県青森市大字合子沢字松森 245 番地 1 内における合子沢松森（4）遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本遺跡の発掘調査は、羽生淳子（大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所 [以下、総合地球環境学研究所]・教授、およびカリフォルニア大学バークリー校人類学科・教授）、大西智和（鹿児島国際大学・教授）、稲野裕介（元 北上市教育委員会文化財課埋蔵文化財係・係長）を中心として行なった。この発掘調査は、カリフォルニア大学バークリー校人類学科東アジア考古学研究室が、学術研究および考古学実習の一環として、青森市教育委員会の協力を得て行なった。

3. 発掘調査の日程は、2008 年は 7 月 7 日から 8 月 12 日まで、2009 年は 7 月 10 日から 8 月 12 日まで、2010 年は 7 月 16 日から 8 月 12 日までである。

4. 出土資料の整理は、2008 年 9 月 1 日より、2013 年 6 月 30 日まで、カリフォルニア大学バークリー校人類学科東アジア考古学研究室および青森市内で行なった。報告書の編集・校正作業は、2014 年 5 月から、2016 年 3 月まで、総合地球環境学研究所で行なった。

5. 発掘調査、出土資料の整理、報告書の編集・校正作業は、以下に示した研究助成を受け、学術調査として実施した。この報告書は、総合地球環境学研究所・フルリサーチ「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」の成果物としての出版である。

- Henry Luce Foundation Institutional Grant for the University of California, Berkeley, Initiative on East Asian and Southeast Asian Archaeology and Early History: Understanding Lifeways and Biocultural Diversity in Prehistoric Japan (2007-2011).

- Center for Japanese Studies Faculty Research Fund, University of California, Berkeley (2008-2011).

- Stahl Endowment Fund, Archaeological Research Facility, University of California, Berkeley (2009-2010; 2012-2013).

- Faculty Research Grant, University of California, Berkeley (2011-2014).

- 総合地球環境学研究所・予備研究「小規模経済を基礎とした人間と環境の新しい相互関係の構築」（2012 年度）。

- 総合地球環境学研究所・予備研究「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」（2013 年度）。

- 総合地球環境学研究所・フルリサーチ「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」（2014～2015 年度）。

6. 本書の編集は、羽生淳子、伊藤由美子（青森県・環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ・主幹）、安達香織（総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員）が行なった。

7. 本書の執筆は、羽生淳子、大西智和、稲野裕介、伊藤由美子、安達香織が分担して行ない、各章毎に執筆者氏名を記した。引用・参考文献は、各章の末尾に記した。

8. 遺構図の図面修正とトレースは、大西智和、伊藤由美子、安達香織が行なった。出土遺物の拓影は、青森市教育委員会所管の埋蔵文化財整理作業場において作成した。最終図版作成は、青森市教育委員会の助力を得て、羽生淳子、大西智和、稲野裕介、伊藤由美子、安達香織が協議のもとに行なった。

9. 本書の写真図版の撮影は、調査状況（写真1～30）を羽生淳子、大西智和、稲野裕介が、出土遺物（写真31～52）を稲野彰子（いろは写房）が行なった。

10. 出土遺物の観察表作成は、羽生淳子、大西智和、稲野裕介、安達香織が行なった。

11. 遺構平面図の方位は、各図に示してある。図中の水系レベルはとくに示さない限り95.400mである。

12. 石器の鑑定は、渡辺丈彦氏（慶應義塾大学・准教授）にご協力いただいた。

13. 土層の色調の観察には、新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄、2008、日本色研事業株式会社）、X-Rite Munsell Color Company, 2000. Munsell Soil Color Charts. Year 2000 Revised Washable Edition を用いた。

14. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関よりご助言、ご協力を得た。記して感謝の意を表する。（敬称略、五十音順）

青森県埋蔵文化財調査センター、青森市教育委員会、青森市公立大学国際交流ハウス、青森乗馬倶楽部、阿古島香、浅田智晴、泉拓良、内山紗央里、遠藤正夫、小笠原雅行、小澤かおる、上條信彦、菊池徹夫、木村高、児玉大成、佐々木雅裕、佐藤孝雄、佐藤将、澤浦亮平、設楽政健、白鳥文雄、神知江、神康夫、真貝理香、杉野森淳子、鈴木三男、関根達人、高橋龍三郎、椿坂恭代、富井典子、浪本あずさ、奈良貴史、成田滋彦、沼宮内陽一郎、松井章、三浦圭介、三上耕一、三宅徹也、三宅奈央子、安田武実、Gary Crawford, Fumiko Ikawa-Smith, Simon Kaner.

発掘調査参加者

【2008年】

羽生淳子、稲野裕介、安達香織、五十嵐淳、出居麻里子、下島綾美、千葉毅、中門亮太、根岸洋、村田弘之、Margeaux Kiyoko Akazawa, Eric Greenwood, Marina Matatova, John Michael Matsunaga, Eric Mendes, Brandon Nida, Devon Reid, KC Roach, Michael Rutledge, Lucas Schwartz, Ashley Slight, Sada Stearns, Amanda Tantisalidchai, Jeromy Van Passen, Sean Wong, Caroline Akiko Yamamoto, and Chris Yap.

【2009年】

羽生淳子、稲野裕介、大西智和、出居麻里子、木村啓章、菅野智則、妹尾裕介、中門亮太、Omer Ahmed, Margeaux Kiyoko Akazawa, Devon Brusey, Alana Carrara, Christopher Doughty, Emily Forscher, Carl Gellert, Sarah Kadish, Yoon Kim, Carlos Lu, Summer Matern, Ariadne Schulz, Lucas Schwartz, Eugene Temlock, and Jeffrey Yancey.

【2010年】

羽生淳子、稲野裕介、大西智和、海藤元、根岸洋、Margeaux Kiyoko Akazawa, Brian Antezana, John Baber, Caitlin Chang, Michelle Daria, Geoff Dowd, Alisha Eastep, Matthew Guardabasio, Katrina Hruska, Katherine Jensen, Habeom Kim, Lauren Levine, Brandon Li, Lisa Osada, and Laura Wong.

資料整理参加者（報告書執筆者以外）

市川あきこ、稲見庸子、小鹿美香子、木村ふみ子、児玉優也、小西佳子、斎藤ひさ子、田中のぶ子、本間順子、室谷るみ子、若山真由美、Omer Ahmed, Margeaux Kiyoko Akazawa, Brad Anderson, Juliette Andrew, Brian Antezana, Lucas Bonick, Alana Carrala, Ian Chadwick, Caitlin Chang, Michelle Daria, Christopher Doughty, John Ertl, Adam Garzoli, Carl Gellert, Shane Griffin, Yu-Hsuan Hsieh, Akari Imamura, Lisa Janz, Nigel Jones, Habeom Kim, Yoon Kim, Olena Komirenko, Brandon Li, Charles Looc, Satoe Nagasaka, Hoa Francisco Ngo, Joo-hyeon Oh, Lisa Osada, Montze Osterlye, Juvenal Quinones, Grant Schechner, Angelina Sharpe, Patrick Singer, Taryn Smith, Amanda Tantisalidchai, Evan Traverso, Serena Van, Pachia Vang, Karen Wiener, Laura Wong, and Sean Wong.

目次

例言

第1章 調査の概要・目的・経過と遺跡の層序 羽生淳子・安達香織

| | |
|---------------------------|----|
| 第1節 遺跡の位置と、遺跡発見および調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡 | 4 |
| 第3節 調査目的 | 4 |
| 第4節 調査の方法と経過 | 5 |
| 第5節 遺跡の層序 | 13 |

第2章 縄文・平安時代の遺構と遺物 羽生淳子・大西智和・稲野裕介・安達香織

第1節 縄文時代

| | |
|----------|----|
| 1. 遺構の概要 | 15 |
| 2. 1号住居址 | 15 |
| 3. 遺物集中 | 23 |
| 4. 1号土坑 | 25 |
| 5. 1号貯蔵穴 | 27 |
| 6. 2号貯蔵穴 | 30 |
| 7. 3号貯蔵穴 | 34 |
| 8. 遺構外 | 36 |

第2節 平安時代

| | |
|----------|----|
| 1. 2号住居址 | 38 |
| 2. 遺構外 | 43 |

第3章 植物遺存体の分析（概報） 伊藤由美子 44

第4章 総括 羽生淳子 46

英文要旨 47

写真図版 49

報告書抄録 76

挿図目次

| | | |
|------|------------------|-------|
| 図 1 | 遺跡位置図 | 2 |
| 図 2 | 調査範囲 | 8 |
| 図 3 | グリッド設定図 | 9 |
| 図 4 | 遺構分布図・遺跡層序 | 10、11 |
| 図 5 | 1号住居址(1) | 16 |
| 図 6 | 1号住居址(2) | 17 |
| 図 7 | 1号住居址出土遺物 | 18 |
| 図 8 | 1号住居址出土遺物 2 | 19 |
| 図 9 | 1号住居址出土遺物 3 | 20 |
| 図 10 | 遺物集中 | 23 |
| 図 11 | 遺物集中出土遺物 | 24 |
| 図 12 | 1号土坑 | 26 |
| 図 13 | 1号土坑出土遺物 | 26 |
| 図 14 | 1号貯蔵穴 | 28、29 |
| 図 15 | 1号貯蔵穴出土遺物 | 30 |
| 図 16 | 2号貯蔵穴 | 31、32 |
| 図 17 | 2号貯蔵穴出土遺物 | 33 |
| 図 18 | 3号貯蔵穴 | 35 |
| 図 19 | 3号貯蔵穴出土遺物 | 36 |
| 図 20 | 遺構外出土縄文時代遺物 | 36 |
| 図 21 | 2号住居址 | 41 |
| 図 22 | 2号住居址出土縄文時代遺物 | 42 |
| 図 23 | 2号住居址出土平安時代遺物 | 42 |
| 図 24 | 遺構外出土平安時代遺物 | 43 |
| 図 25 | 2008年調査時出土のオニグルミ | 45 |
| 図 26 | 2008年調査時出土のクリ | 45 |

表目次

| | | |
|-----|------------------|-------|
| 表 1 | 周辺の遺跡一覧表 | 3 |
| 表 2 | 1号住居址出土遺物観察表 | 20、21 |
| 表 3 | 遺物集中出土遺物観察表 | 25 |
| 表 4 | 1号土坑出土遺物観察表 | 26 |
| 表 5 | 1号貯蔵穴出土遺物観察表 | 30 |
| 表 6 | 2号貯蔵穴出土遺物観察表 | 33 |
| 表 7 | 3号貯蔵穴出土遺物観察表 | 36 |
| 表 8 | 遺構外出土縄文時代遺物観察表 | 37 |
| 表 9 | 2号住居址出土縄文時代遺物観察表 | 42 |

写真目次

| | | |
|-------|-----------------------------|----|
| 写真 1 | 2008 年調査終了時の合子沢松森 (4) 遺跡 | 51 |
| 写真 2 | 2009 年調査終了時の合子沢松森 (4) 遺跡 | 51 |
| 写真 3 | 2010 年調査終了時の合子沢松森 (4) 遺跡 | 52 |
| 写真 4 | 合子沢松森 (4) 遺跡調査風景 (2008 年) | 52 |
| 写真 5 | 合子沢松森 (4) 遺跡調査風景 (2009 年) | 53 |
| 写真 6 | 合子沢松森 (4) 遺跡調査風景 (2010 年) | 53 |
| 写真 7 | 2008 年調査参加者集合写真 | 54 |
| 写真 8 | 2009 年調査参加者集合写真 | 54 |
| 写真 9 | 2010 年調査参加者集合写真 | 55 |
| 写真 10 | フローテーション作業 | 55 |
| 写真 11 | 2008 年発掘開始時の遺構確認状況 (1 号住居址) | 56 |
| 写真 12 | 遺構確認面 | 56 |
| 写真 13 | 1 号住居址東西セクション北から | 57 |
| 写真 14 | 1 号住居址南北セクション西から (北半部) | 57 |
| 写真 15 | 1 号住居址南北セクション西から (南半部) | 57 |
| 写真 16 | 1 号住居址 | 58 |
| 写真 17 | 炉 | 58 |
| 写真 18 | 炉及び特殊遺構 | 59 |
| 写真 19 | 遺物集中 | 59 |
| 写真 20 | 1 号土坑東西セクション南から | 60 |
| 写真 21 | 2008 年調査時の 1 号貯蔵穴 | 60 |
| 写真 22 | 1 号貯蔵穴 (平面) | 61 |
| 写真 23 | 1 号貯蔵穴南北セクション東から | 61 |
| 写真 24 | 2 号貯蔵穴 (平面) | 62 |
| 写真 25 | 2 号貯蔵穴南北セクション西から | 62 |
| 写真 26 | 2 号貯蔵穴 | 63 |
| 写真 27 | 2 号貯蔵穴出土土器 | 63 |
| 写真 28 | 3 号貯蔵穴東西セクション南から | 64 |
| 写真 29 | 2 号住居址 (平面) | 64 |
| 写真 30 | 2 号住居址南北セクション西から | 65 |
| 写真 31 | 1 号住居址出土土器 1 | 65 |
| 写真 32 | 1 号住居址出土土器 2 | 66 |
| 写真 33 | 1 号住居址出土土器 3 | 66 |

| | | |
|-------|----------------------------------|----|
| 写真 34 | 1号住居址出土土器 4 | 67 |
| 写真 35 | 1号住居址出土土器 5 | 67 |
| 写真 36 | 1号住居址出土土器 6 | 68 |
| 写真 37 | 1号住居址出土土器 7 | 68 |
| 写真 38 | 1号住居址出土土器 8 | 69 |
| 写真 39 | 1号住居址出土土製品 | 69 |
| 写真 40 | 1号住居址柱穴出土土器 | 69 |
| 写真 41 | 遺物集中出土土器 1 | 70 |
| 写真 42 | 遺物集中出土土器 2 | 70 |
| 写真 43 | 遺物集中出土土器 3 | 71 |
| 写真 44 | 1号土坑出土土器 | 71 |
| 写真 45 | 1号貯藏穴出土土器 | 72 |
| 写真 46 | 2号貯藏穴出土土器 1 | 72 |
| 写真 47 | 2号貯藏穴出土土器 2 | 73 |
| 写真 48 | 3号貯藏穴出土土器 | 73 |
| 写真 49 | 遺構外出土縄文時代土器 | 74 |
| 写真 50 | 2号住居址出土縄文時代土器 | 74 |
| 写真 51 | 2号住居址出土平安時代土器・遺構外（下段左二点）出土平安時代土器 | 75 |
| 写真 52 | 1号住居址（1～3）・2号住居址（4）・遺構外（5）出土石器 | 75 |

第1章 調査の概要・目的・経過と遺跡の層序

羽生 淳子・安達 香織

第1節 遺跡の位置と、遺跡発見および調査に至る経緯

合子沢松森（4）遺跡は、青森公立大学から、合子沢川の流れる谷をへだてて西に約1 kmの地点に位置する（図1）。標高は、地表面で、約95.3～95.7 mを測る。遺跡の所在地は、青森県青森市大字合子沢字松森245番地1である。

本遺跡は、青森市が所有する青森市農林水産部（以下、農林水産部）農業政策課畜産振興センター（以下、畜産振興センター）の敷地内に所在する。同敷地のうち、今回の発掘部分を含む北側は、（有）青森馬事普及「青森乗馬倶楽部」が畜産振興センターより借り受けている。2007年4月末～5月初旬に、乗馬倶楽部インストラクター三宅奈央子氏が、乗馬倶楽部用地内の東側谷近くに野菜畑を作ろうと約2×3 mを深さ20cmほど掘ったところ、縄文時代の土器片が出土した。三宅奈央子氏は、この発見を父親である三宅徹也氏（同倶楽部員、当時、青森県埋蔵文化財調査センター次長）に直ちに報告した。

5月4日に、三宅徹也氏が現地において掘削範囲の土を除去して平坦にしたところ、暗褐色土の掘り込みが確認された。同氏は、その大きさから住居址遺構と考え、また、時代については、すでに出土していた土器から、縄文時代中期初めの円筒上層式期と推定した。遺構はそのまま埋め戻された。

2007年7月17日～8月12日に、カリフォルニア大学バークリー校人類学科准教授（当時）羽生淳子は、自身の研究および学生の夏期講習のため、同県三内丸山遺跡対策室が実施する調査に学生とともに参加した。しかし、同対策室の調査計画が変更された結果、実習および土壌サンプリングの内容が極めて限られたものとなったため、7月中旬に青森県埋蔵文化財センターを訪れ、協力を依頼した。これを受けて、同センターは、三内丸山（2）遺跡の発掘時に採取された土壌のブロック・サンプルを提供すると共に、青森県蓬田村山田（2）遺跡における土壌サンプルの採取と、発掘調査への学生の参加を許可した。

8月10日、羽生が同センターを訪問し、三宅次長らに、それまでの協力に対する感謝を述べるとともに、次年度についての協力を依頼した。そして、土層の判別が比較的容易で遺構の重複が少ない縄文時代前期～中期の住居址の発掘を希望し、候補地について相談した。

8月15日に、三宅次長が、乗馬倶楽部敷地内における、縄文時代中期の住居址と推定される遺構の存在を思い出し、同センター主事（当時）の伊藤由美子氏を介して羽生に連絡した。8月19日には、三宅次長、伊藤氏、羽生が現地を視察し、掘削範囲の土を再び除去して遺構

合子沢松森（4）遺跡



図1 遺跡位置図 (国土地理院, 1996 1:50,000「青森西部」、1997 同「青森東部」に加筆)

表1 周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 時期 | 種別 | 遺跡番号 |
|----|------------|--------------|----------|--------|
| 1 | 合子沢松森（4）遺跡 | 縄文・平安 | 集落跡 | 201327 |
| 2 | 野木（1）遺跡 | 縄文・平安 | 散布地、集落跡 | 201210 |
| 3 | 合子沢松森（1）遺跡 | 縄文 | 散布地 | 201261 |
| 4 | 合子沢松森（2）遺跡 | 縄文（早・前・後）・平安 | 散布地、集落跡 | 201262 |
| 5 | 横内（1）遺跡 | 縄文（前） | 散布地 | 201164 |
| 6 | 横内（2）遺跡 | 縄文 | 散布地 | 201210 |
| 7 | 桜峯（1）遺跡 | 縄文（前・中・後） | 散布地 | 201207 |
| 8 | 桜峯（2）遺跡 | 縄文（前・中・後） | 散布地 | 201208 |
| 9 | 山口遺跡 | 縄文（前・後） | 散布地 | 201271 |
| 10 | 雲谷山吹（1）遺跡 | 縄文（後） | 散布地 | 201199 |
| 11 | 雲谷山吹（2）遺跡 | 縄文 | 散布地 | 201263 |
| 12 | 三内丸山遺跡 | 縄文（前・中・後）・平安 | 集落跡、配石遺構 | 201021 |

の存在を確認した。

11月13～14日には、羽生が再度青森を訪問し、農林水産部および青森乗馬倶楽部と発掘調査や書類手続きについて協議し、さらに、三宅次長、青森市教育委員会文化財課と、次年度の発掘計画について相談した。

2008年1月には、埋蔵文化財の発掘に関する届出書や行政財産使用許可申請書等の作成準備を開始し、3月には、青森市より行政財産使用許可を得た。埋蔵文化財の発掘に関する届出等の手続きは、2009年、2010年度についても同様に行なった。

本遺跡の西側には、同一台地上に野木（1）遺跡が位置しており、北には縄文時代前期と後期の土器の散布する山口遺跡が近接するが、青森市教育委員会が別遺跡と判断し、地名を取って合子沢松森（4）遺跡と名づけられた。なお、本遺跡から北に約1～1.5km離れた地点には、合子沢松森（1）遺跡と合子沢松森（2）遺跡が所在する。前者は縄文時代の、後者は平安時代の土器の散布地である（青森市教育委員会2007）。

本遺跡の発掘対象面積は、42㎡である。

第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡は、八甲田山に連なる火山性台地北端の、南から北に向かい緩やかに傾斜する丘陵地に位置している（工藤1998）。遺跡の東側は合子沢川が流れる谷に面しており、発掘地点の東南側から数メートル先は急斜面の林となる。調査区付近はほぼ平坦地となっているが、これは現代における削平と盛土の結果である（図1、2参照）。

本遺跡から合子沢川をへだてた東側の台地には、桜峯（1）遺跡、桜峯（2）遺跡、横内（1）遺跡、横内（2）遺跡、雲谷山吹（1）遺跡、雲谷山吹（2）遺跡等、数多くの遺跡が分布し

ている（図1、表1）。このうち縄文時代前期・中期に帰属する主な遺跡として、横内（1）・（2）遺跡、桜峯（1）・（2）遺跡があげられる。横内（1）遺跡からは、早期から中期までの遺物が出土し、円筒下層 b 式土器を伴う竪穴式住居址 1 軒、円筒下層 d₂ 式土器を伴う竪穴住居址 2 軒が検出されている。横内（2）遺跡では、円筒下層 d₂ 式、円筒上層 a 式土器が量的に多く出土しており、当該期の土坑 26 基、平安時代の竪穴住居址 1 軒を検出している（青森市教育委員会 1995a）。桜峯（1）遺跡からは、縄文時代前期から晩期、続縄文、平安時代の土器が検出されている。円筒下層 d₂ 式、上層 a 式土器が主体となり出土している。竪穴住居址 7 軒、土坑 54 基、埋設遺構 11 基、遺物集中ブロック 1 ケ所などが検出されており、これらは前期末から中期中葉の遺構である（青森市教育委員会 1996、1997、1998b）。さらに、桜峯（2）遺跡からは縄文時代早期から平安時代の遺物が出土し、円筒下層 a・b 式土器が主体となり出土している。中期前半の竪穴住居址 1 軒、土坑 35 基、中期後半の配石遺構 2 基などの遺構が検出されている（青森市教育委員会 1995a）。青森市南部における、八甲田山火山性台地上に位置する近隣の遺跡については、桜峯（1）遺跡の報告書に概要が掲載されている（青森市教育委員会 1998a, p.12-14）。

本遺跡の西方には、平安時代の集落跡を中心とする野木（1）遺跡（青森市教育委員会 2001）が調査されている。青森市教育委員会が 1997、1998 年に行なった野木遺跡の発掘調査では、縄文時代の竪穴住居址 8 軒および弥生時代の土坑 36 基が検出されているほか、平安時代の竪穴住居址 196 軒、竪穴遺構 52 基、土坑 221 基、ピット 221 基、柵 12 列、掘立柱建物跡 19 棟、鉄生産関連遺構 4 基、畝状遺構 1 ケ所が検出された。また、北には山口遺跡が隣接する。山口遺跡は縄文時代前・後期の散布地である（青森県教育委員会, 2015 <http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/isekitizu.html>（青森県遺跡地図））。

第3節 調査目的

青森市内の縄文時代前期～中期の遺跡としては、青森平野西部低位段丘上に位置する三内丸山遺跡をはじめとする、多数の住居を伴ういわゆる大集落遺跡が注目を集めている（青森県史編さん考古部会編 2002）。しかし、同時期の遺跡は、大集落だけではない。例えば、八甲田山寄りの火山性台地上には、上記の桜峯（2）遺跡（青森市教育委員会 1995b）及び横内遺跡（青森市教育委員会 1995a）を含む複数の遺跡において、当該期に比定される住居址を検出した比較的小規模な集落遺跡の調査例が報告されている。これらの小規模な集落遺跡は、その立地や出土遺物の違いなどから、大集落とは異なった機能・生業の特徴を有していた可能性が高い。

そこで、今回の発掘では、三内丸山遺跡周辺に位置する縄文時代円筒式期の小集落を発掘することにより、この時期における遺跡間の機能差を検討するための資料を蓄積することを主たる研究目的とした。この目的のために、出土遺物と遺構の型式学的な分析に加えて、AMS¹⁴C

年代測定、炭化植物遺存体分析、植物珪酸体分析、土壌の微細形態学的分析、および残存脂質分析を目的として、体系的な土壌サンプルの採取を行なった。とくに、植物遺存体については、遺構の覆土をフローテーションすることを当初より想定して、東西 25cm × 南北 25cm × 厚さ 5cm のカットで土壌を採取した。

以上の研究目的に加えて、今回の発掘では、第2に、カリフォルニア大学バークリー校の学生をはじめとする北アメリカの学部生・大学院生に、縄文時代住居址の発掘を通して、遺構の発掘方法と実測の基礎を学ぶ機会を提供するという実習目的を掲げた。具体的には、住居址の確認から、遺構セクションベルトの設定、覆土の掘り下げ、床面・炉・柱穴の確認、覆土サンプルの採取とフローテーション、遺構の平面図・断面図の作成、レベルおよびトータル・ステーションの使用方法等について実習を行なった。

第4節 調査の方法と経過

第1節に述べたように、本遺跡の発見は、2007年春に、野菜畑の設置を目的として行われた 2 m × 3 m × 20 cm の掘削に端を発する。そこで、2008年7月の発掘調査開始時には、まず、この掘削部分の土を除去し、住居址と考えられる遺構の確認を行なった（写真11）。そして、この遺構確認地点を広げる形で、南北6メートル、東西7メートル、計 42 m² の調査区域を設定した（図2、3）。

遺構の平面および遺物の出土位置を記録する方法としては、グリッド・システムを採用した。具体的には、1 m × 1 m のメッシュを調査区域全体にかぶせ、各ラインには、東から西へ A ライン～H ライン、北から南に 7 ライン～13 ラインと名称を付した（図3）。グリッドの南北軸は、真北を基準とした。平面直角座標系（世界測地系 JGD2000）第 X 系における A 7 の座標は、X = 83693 m、Y = - 6533 m である。緯度経度では、北緯 40° 45′ 13″、東経 140° 45′ 21″ となる（国土地理院測地部，2015 <http://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/surveycalc/surveycalc/xy2blf.html>）。

発掘区域内では、A ラインと 7 ラインの交差点を北東端にもつグリッドを A 7 杭と呼称し、以下同様にして各グリッドの名称とした。さらに、土壌サンプル採取を目的として、25 cm × 25 cm のメッシュを各グリッドにかぶせ、東から西へ a ～ d ライン、北から南に 1 ～ 4 ラインと名称を付し、a ラインと 1 ラインの交差する点を北東端にもつユニットを a1 ユニットと呼称した（図3）。

遺構および遺物の出土位置については、T8（図3）（X = 83692.609、Y = - 6530.667）上にトータルステーションを設置し、T6（X = 83711.689、Y = - 6501.845）を基準として記録した。

発掘調査は2008年は7月7日から8月12日まで、2009年は7月10日から8月12日まで、2010年は7月16日から8月12日まで行なった。調査にあたっては、各遺構に対して、発

見された順に通し番号をつけ、これを、発掘時および遺物整理時の仮の遺構番号とした。そして、報告書の作成時に、遺構の種別ごと（住居址、遺物集中、土坑、貯蔵穴）に、番号をふりかえ、報告および記載を行なった。発掘時および遺物整理時の仮の遺構番号（旧番号）は、具体的には House 1、Feature 1～26 である。このうち House 1 は 1 号住居址に、Feature 5 は遺物集中に、Feature 12 は 1 号土坑に、Feature 13 は 1 号貯蔵穴に、Feature 19 は 2 号貯蔵穴に、Feature 20 に 2 号住居址に、Feature 22 は 3 号貯蔵穴にふりかえを行なった。Feature 4 は 2 号住居址の覆土であり、Feature 17 は 1 号住居址の覆土である。この他の旧番号をふったものは、攪乱と認定した。なお、1 号住居址の柱穴についても、Pit 1 から順に仮番号をふり、報告書の作成時に、P1～6 として整理した。具体的には、Pit 1 は P1 に、Pit 2（Pit 2a・2b）は P2（P2a・2b）に、Pit 3a は P6 に、Pit 3b は P3 に、Pit 4 は P4 に、Pit 3c は P5 である。検出された遺構の分布図を図 4 に示す。

調査の経過および主な遺構の調査日程の概略を以下に示す。

【2008 年】

7 月 7 日 学生到着に先立ち、調査担当者とスタッフが、調査区域に測量原点を設定。

7 月 8 日 調査区域近辺の草刈り開始。

7 月 9 日 野菜畑のための掘削部分の土を除去し、住居址と思われる遺構を確認（写真 11）。

7 月 9～12 日 調査区域近辺の草刈を継続。グリッド杭を設定。

7 月 13 日 実習参加の学生が青森に到着。

7 月 14 日 実習に先立ち、青森市内の縄文遺跡の概要と発掘調査の目的についての講義。三内丸山遺跡見学。

7 月 15 日 発掘調査区域内の表土剥ぎ。

7 月 16 日～8 月 10 日 遺構の平面プランの確認と発掘。野菜畑のための掘削部分においては、住居址と推定された遺構の確認面は、表土の下がローム層となっており、現代の整地によって、縄文時代以降の堆積層がすでに取り除かれていることが確認された。住居址確認面に近い谷斜面に近い南東部では、図 4 に 6a・6b 層として示した黒褐色の耕作土が堆積しており、これを除去したのち遺構の平面プランの確認にとりかかった。

1 号住居址と遺物集中：住居址と推定された遺構については、円形に近いプランを確認したため、1 号住居址と命名。7 月 24 日までに、1 号住居址の覆土上部に確認された遺物集中を実測の後、住居プランの中央を通る形でセクションベルトを設定し、北東部分と北西部分の発掘を開始した。調査の進行に伴い、1 号住居址については、床面に段を持つことが判明。北西部分については段の下部までを発掘したが、北東部については、時間の制約から 2008 年夏には段の上部までの発掘となった。

1 号貯蔵穴：調査区西壁側 G10～G11 付近に、貯蔵穴と考えられる遺構を発見し、調査区域内の南側半分を発掘した。西半分は調査区域外であった。

2 号貯蔵穴：B10 付近にも貯蔵穴と考えられる遺構を発見し、南西側約四分の一を発掘した。

2号住居址：調査区北東部分、A 7グリッドにおいて、焼土を検出したため、遺構として調査したが、その後の精査で、この焼土を含むA 7～A 8付近に方形の住居址と考えられる遺構プランの一部を確認した。この遺構については、そのプランと覆土の状況から平安時代の住居址と推定し、次年度に調査を持ち越した。

8月11日 調査区全景写真撮影。調査区域の埋め戻し。

8月12日 2008年の調査終了。

【2009年】

7月7日 実習参加の学生が青森に到着。

7月8日 実習前の講義。

7月9～12日 調査区域内の埋め戻し土の除去。グリッド杭の確認。測量実習。

7月14日～8月11日 前年度に確認した遺構の発掘を継続。

1号住居址：前年度未発掘であった住居址北東部の段の内部を掘り進めた。その結果、U字状の土手を伴う特殊遺構が存在することを確認し、その部分の発掘も行なった。さらに、住居址南西部四分の一についても、段の下部まで発掘した。

1号貯蔵穴：昨年度未調査であった調査区域内の北側部分を発掘した。これにより、調査区域内部分については遺構が完掘された。

2号貯蔵穴：昨年度未調査であった北西側約四分の一を発掘した。覆土中から、半完形の土器が出土した。この遺構に関しては、東半分は発掘を見送り、セクション面より柱状土壌サンプルを採取した。

2号住居址：発掘区域内の2号住居址覆土を発掘し、床面を確認した。住居床西側隅に、縄文時代の貯蔵穴と思われる新たな遺構（3号貯蔵穴）を発見した。

3号貯蔵穴：入口部南側のみを部分的に発掘した。

8月12日 調査区全景写真撮影。調査区域の埋め戻し。

【2010年】

7月14日 実習参加の学生が青森に到着。

7月15日 実習前の講義。三内丸山遺跡見学。

7月16～17日 調査区域内の埋め戻し土の除去。

7月19日～8月10日 前年度に続き、遺構の発掘。雨が多く、発掘作業は予定より時間がかかった。

1号住居址：前年度未発掘であった住居址南東部四分の一を発掘した後に、ベルトをはずし、炉および柱穴を発掘。8月5日に、調査区全景写真を撮影後に、住居床南東側の貼り床部分を発掘。また、特殊遺構の土手部分にサブトレンチを入れ、セクションを確認。

8月11～12日 調査区域の埋め戻し。

合子沢松森（４）遺跡

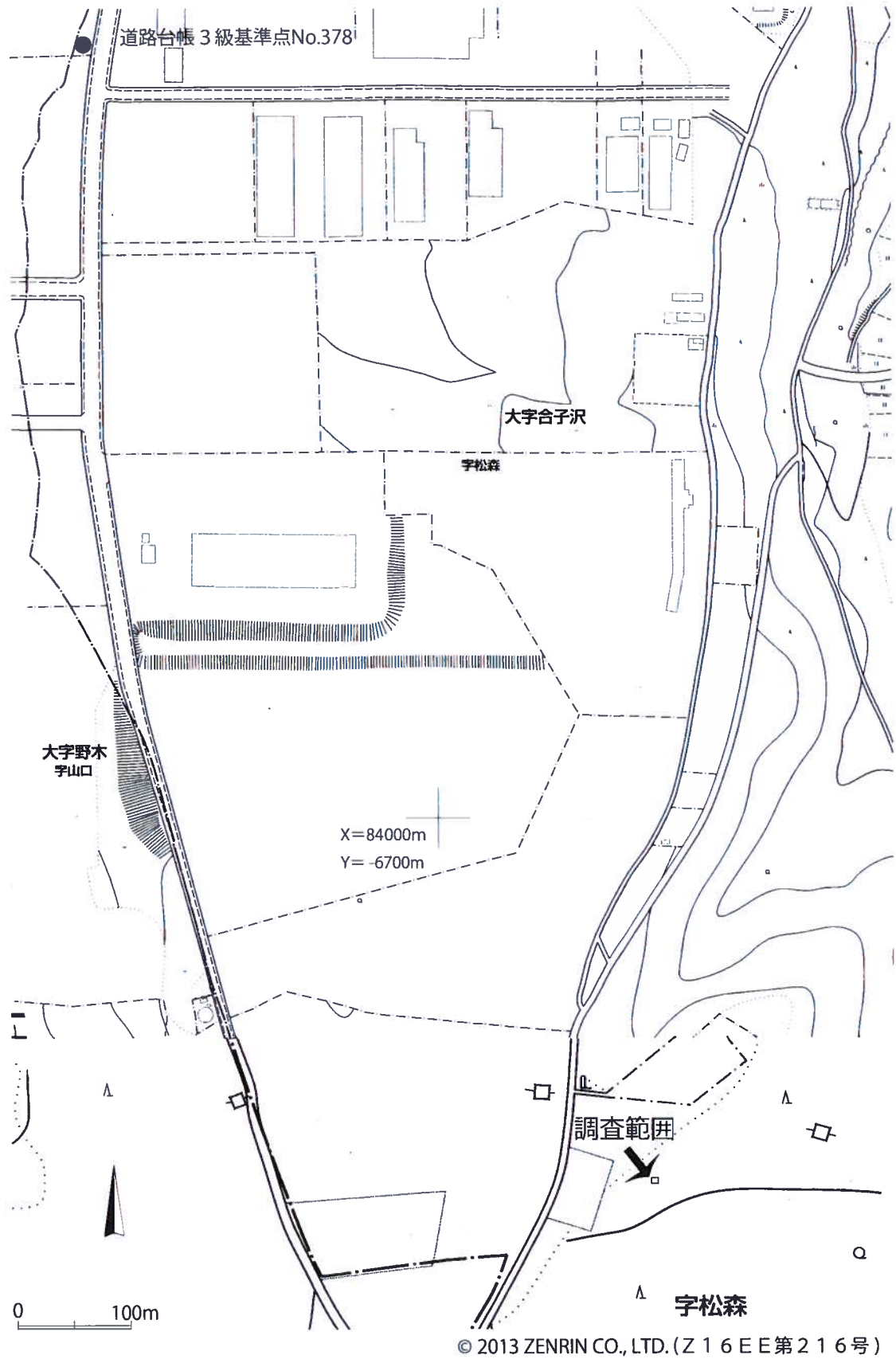


図2 調査範囲（ゼンリン，2013 住宅地図「青森市2 西部」「161」、「164」に加筆）

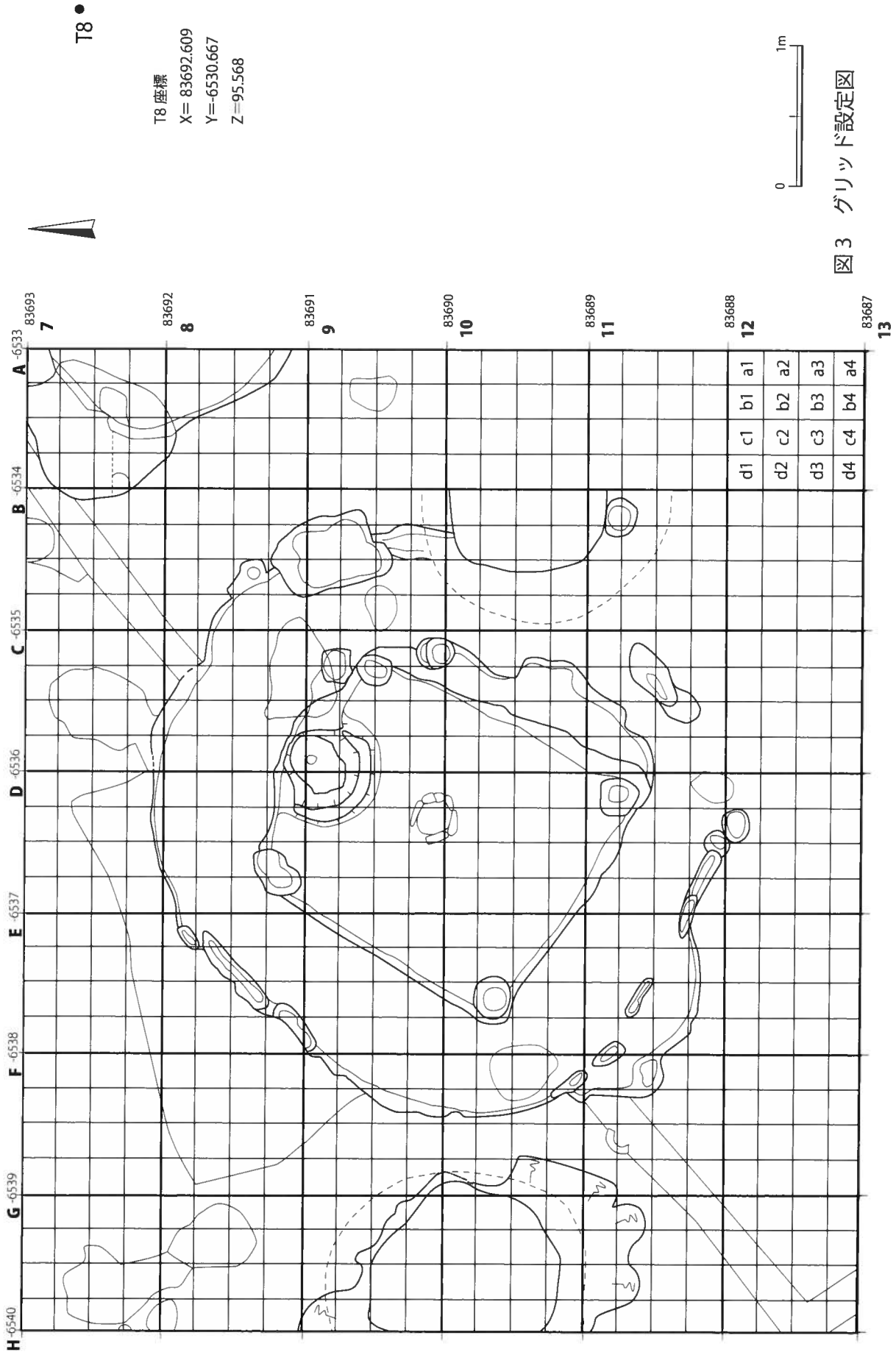
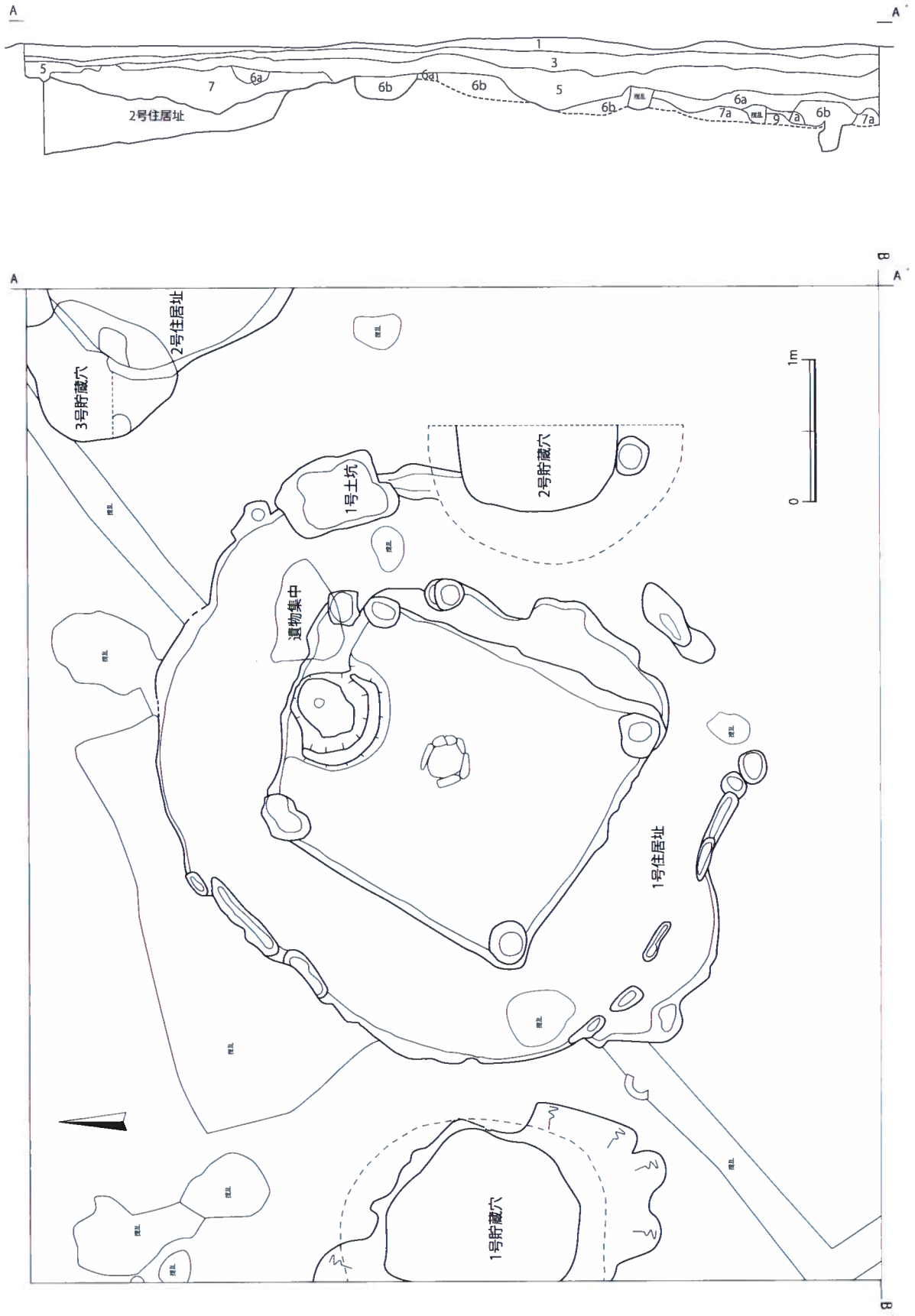
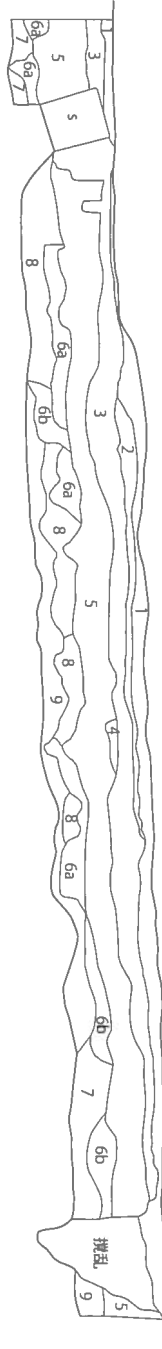


図3 グリッド設定図

合子沢松森（4）遺跡





— 8 —

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|-------------------------|-----------|------------|-------------------------------|-----------------|
| 1 | 10YR4/2(灰黄褐) | 弱い | わずかにあり | | 灰土 |
| 2 | 7.5YR4/4(褐) | よくしまっている | わずかにあり(砂質) | パミス(細粒)5~7%、砂質(上部に灰色の砂)25~30% | 墓地層、上明褐色、下混入物多量 |
| 3 | 7.5YR3/1(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(細粒)1% | 墓地層、上明褐色、下混入物多量 |
| 4 | 10YR3/4(暗褐) | 普通 | あり | 黄色パミス1% | 小礫まじりの墓地層 |
| 5 | 7.5YR3/1(黒褐) | やや強い | ややあり | 小礫(細粒)2% | 耕作層 |
| 6a | 7.5YR3/1(黒褐) | 弱い | あり | なし | 耕作層 |
| 6b | 10YR2/2(黒褐) | 普通 | わずかにあり | 灰白色パミス(極細粒)1% | 耕作層か |
| 7 | 10YR3/3(暗褐)~10YR3/4(暗褐) | よくしまっている | 比較的あり | 炭化物少量2% | |
| 8 | 10YR4/6(褐) | 普通 | かなりあり | ローム(3~5mm)2%、炭化物片(3~5mm)2% | |
| 9 | 7.5YR4/4(褐) | 比較的しまっている | わずかにあり | | |

図4 遺構分布図・遺跡層序

遺物について

各遺構内から出土した出土した資料は、原則として、トータル・ステーションで出土位置を記録した。遺構外から出土した資料については、原則として、1 m²のグリッドごとで取り上げた。全ての資料は、洗浄したのち、可能なものについては、注記および接合作業を行ない、実測図を作成した。

土器の圧痕調査について

出土資料の整理時に、全土器を対象とした圧痕調査を実施した。しかし、種子圧痕は観察できなかった。

大型植物遺存体の定量分析を目的とした土壌のカット・サンプルの採取について

日本の遺跡発掘では、低湿地遺跡を除き一般に有機遺物の保存状態は不良である。そのため、土壌のフローテーションは一般的ではない。しかし、これまで三内丸山遺跡等で筆者らが採取した非低湿地層の土壌サンプルには、少量の炭化種子と共に、クルミなどの木の実の殻の破片が多量に含まれていた。木の実の殻は一年毎に結実するので、炭素年代測定を行うのに適した資料である。そこで、これらの炭化植物遺存体の選別を主な目的として、今回の発掘では、遺構の覆土を体系的に採取し、フローテーション法を用いて、ライト・フラクション（L F；上面に浮いた内容物）とヘビー・フラクション（H F；沈殿した内容物）の両者について、2mmと1mmのメッシュで内容物の回収を行なった。土壌サンプルは、図3に示した25×25×5 cmのユニットに基づいて、カット・サンプルとして採取した。1号住居址については、覆土のほぼ全量を採取しフローテーションを行なった（写真10）。1号貯蔵穴と2号貯蔵穴、および2号住居址については、床面近くおよび断面のコラムサンプルを中心として、土壌サンプルを部分的に採取し、1号住居址と同様のフローテーションを行なった。

回収したH FとL Fのうち、L Fについては2mm、1mmの両者について、H Fについては2mmのみ、選別・同定作業を行なった。

残存脂質分析用土器サンプルについて

今回の発掘では、ブラッドフォード大学カール・ヘロン教授とヨーク大学オリバー・クレイグ博士に、土器の残存脂質分析を依頼した。分析用資料は、発掘時のコンタミネーションを最小限にとどめるため軍手を用いて取り上げ、紙袋に保存した。これらの資料については拓本・実測図を作成せずに分析に供した。

第5節 遺跡の層序

合子沢松森（4）遺跡の層序は、上位から1層から9層に区分される（図4）。1層は表層と下層に細分され、6層はaとb層に細分される。以下、各土層について説明する。

1層：表土である。色調 10YR4/2（灰黄褐）。しまり弱い。粘性わずかにあり。

2層：整地層である。色調 7.5YR4/4（褐）。ただし上半部は明褐色。よくしまっている。粘性わずかにあり（砂質）。下半部は混入物多種。

3層：整地層である。色調 7.5YR3/1（黒褐）。ただし上半部は明褐色。比較的しまっている。粘性ややあり。混入物パミス（細粒）5～7%、砂質（上部に灰色の砂）25～30%。下半部は混入物多種。

4層：整地層である。色調 10YR3/4（暗褐）。しまり普通。粘性あり。混入物黄色パミス1%。

5層：小礫まじりの整地層である。色調 7.5YR3/1（黒褐）。しまりやや弱い。粘性ややあり。混入物小礫（細粒）2%。

6a層：耕作層である。色調 7.5YR3/1（黒褐）。しまり弱い。粘性あり。

6b層：耕作層か。色調 10YR2/2（黒褐）。しまり普通。粘性わずかにあり。

7層：縄文時代の堆積層である。色調 10YR3/3（暗褐）～10YR3/4（暗褐）。よくしまっている。粘性比較的あり。混入物灰白色パミス（極細粒）1%。

8層：漸移層である。色調 10YR4/6（褐）。しまり普通。粘性かなりあり。混入物炭化物少量2%。

9層：ローム層地山。

以上の土層の堆積状況からは、次のような層序形成が想定される。縄文時代以降の堆積層（7層）は、上部を部分的に耕作（6a・6b層）によって削られた。その後、比較的水平に整地された（2、3、4、5層）。耕作によって上部が部分的に削られている部分もありながらも、住居址などの遺構は比較的良好に残存していた。

引用・参考文献

青森県教育委員会，1998：新町野遺跡・野木遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第239集。

青森県教育委員会，1999：野木遺跡Ⅱ 青森県埋蔵文化財調査報告書第264集。

青森県教育委員会，2000：野木遺跡Ⅲ 青森県埋蔵文化財調査報告書第281集。

青森県史編さん考古部会，2002：青森県史 別編 三内丸山遺跡。

青森市教育委員会，1995a：横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調

合子沢松森（4）遺跡

査報告書第 24 集。

青森市教育委員会, 1995b: 桜峯（2）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第 26 集。

青森市教育委員会, 1996: 桜峯（1）遺跡発掘調査概報 青森市埋蔵文化財調査報告書第 27 集。

青森市教育委員会, 1997: 桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ 青森市埋蔵文化財調査報告書第 32 集。

青森市教育委員会, 1998a: 桜峯（1）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第 36 集。

青森市教育委員会, 1998b: 野木遺跡発掘調査概報 青森市埋蔵文化財調査報告書第 41 集。

青森市教育委員会, 1999: 新町野・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ 青森市埋蔵文化財調査報告書第 46 集。

青森市教育委員会, 2000: 桜峯（1）・雲谷山吹（3）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第 51 集。

青森市教育委員会, 2001: 新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ 青森市埋蔵文化財調査報告書第 54 集。

青森市教育委員会, 2005: 合子沢松森遺跡（2）発掘調査概報 青森市埋蔵文化財調査報告書第 80 集。

青森市教育委員会, 2006: 合子沢松森遺跡（2）発掘調査概報Ⅱ 青森市埋蔵文化財調査報告書第 83 集。

青森市教育委員会, 2007: 合子沢松森（2）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第 93 集。

工藤一彌, 1998: 第Ⅱ章 遺跡の環境 第3節 遺跡周辺の地形と地質。桜峯（1）遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第 36 集, pp.15-16。

第2章 縄文・平安時代の遺構と遺物

羽生 淳子・大西 智和・稲野 裕介・安達 香織

第1節 縄文時代

1. 遺構の概要

主な縄文時代の遺構としては、竪穴住居址、貯蔵穴、土坑、遺物集中が検出された。

1号住居址は、調査区域の主体を占める遺構である。1号住居址に伴って、特殊遺構、P 1、P 2 a、P 2 b、P 3、P 4、P 5、P 6の計7本の柱穴が検出された。

遺物集中は、1号住居址覆土の最上部で検出された。1号土坑は、1号住居址を切る遺構であった。さらに、調査区域の西端で1号貯蔵穴が、B10グリッド付近で2号貯蔵穴が検出された。3号貯蔵穴は、平安時代の遺構である2号住居址によって切られている遺構であり、調査区域の北東端に位置する。

これらの縄文時代の遺構から出土した土器のほとんどは、円筒下層 d₂式に比定できる。なお観察表における d、d₁、d₂ はそれぞれ円筒下層 d、d₁、d₂ 式を指し、a は円筒上層 a 式を指す。他に1号貯蔵穴から中期後半から後期前半の土器が2片、蛸沢式をふくむ後期前半の土器が3片、遺構外から後期前半と考えられる土器1片が出土した。

2. 1号住居址 (図5～9、表2、写真11～18、52)

(1) 遺構の概要

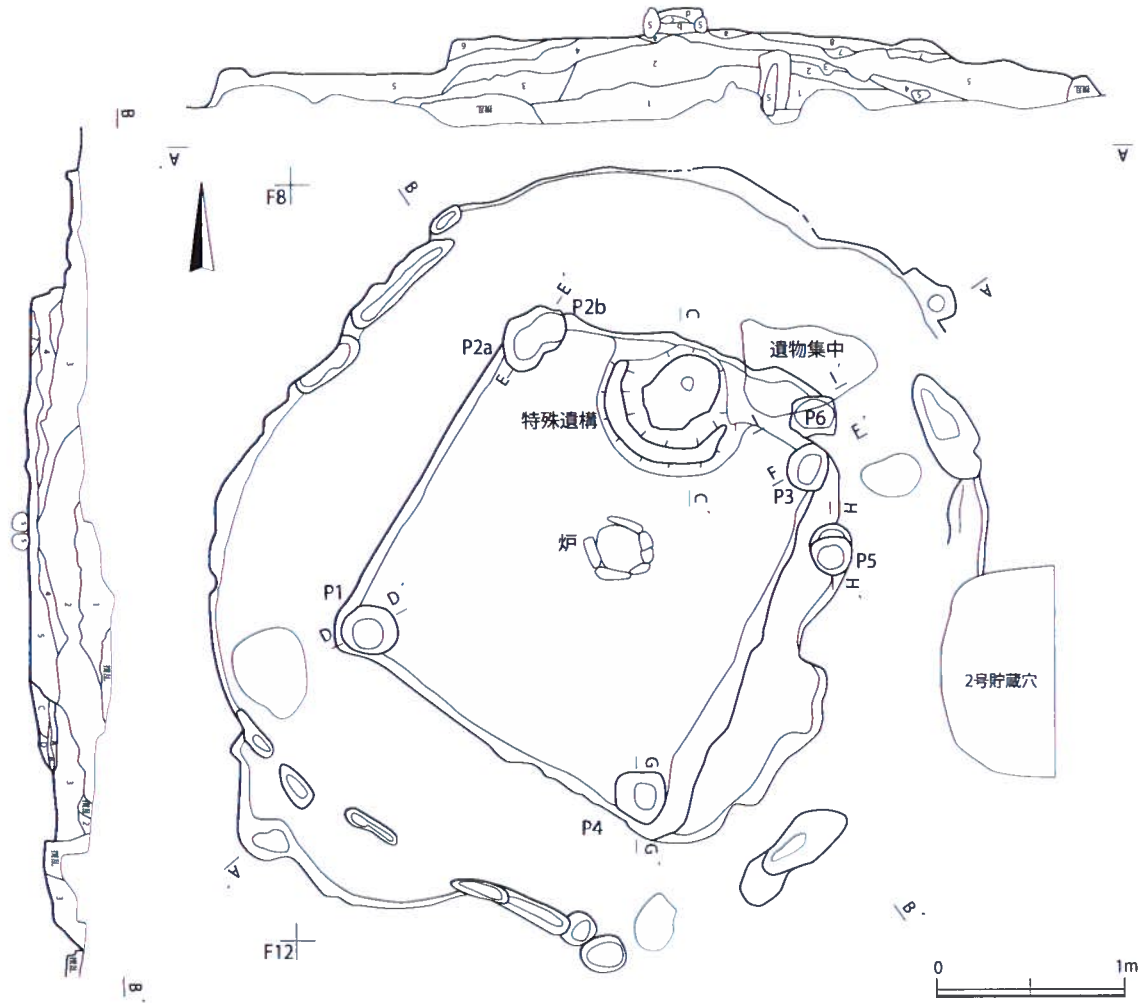
[位置] 1号住居址は、グリッド B8～11、C7～11、D7～11、E8～11、F9～11 に位置する (図3)。

[遺構の確認の経緯] 前述のように、本住居址は、2007年に野菜畑のための掘削作業が行なわれた際、その平面プランの一部が確認された。当初の確認箇所は、今回の調査グリッド区分では、主としてD7、E8、F9グリッド付近に当たる。

[平面形・規模] 東側の壁は斜面のため不検出であるが、平面形は、長軸約4.5m直径約4m、短軸4m弱(推定値)の、やや下膨らみの丸みをおびた隅丸方形と推定される。

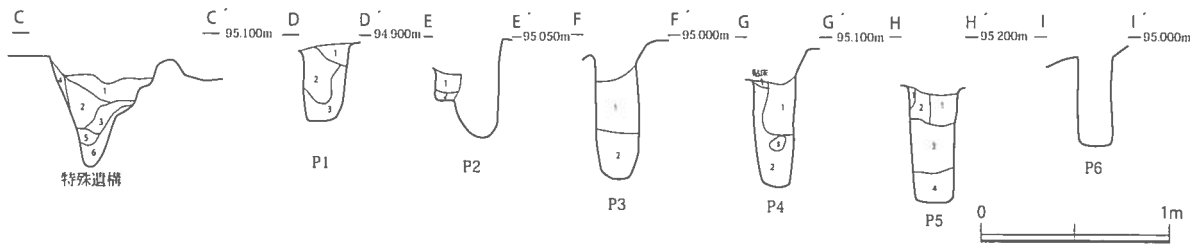
[床面とベンチ状施設・特殊遺構] 本住居址の床面は壁際が一段高くなっており、住居内部(C8～11、D8～11、E9～10)に平面四角形の掘り込みを持つ段状の構造を持つ。掘り

合子沢松森(4)遺跡



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|----------------------------|-----------|-------------|--|-------------------------------------|
| 1 | 10YR4/4(褐) | やや弱い | あり | 炭化物(～10mm)1%、黄褐色バミス(10mm程度、一部ロームブロック)2%、灰色バミス(～10mm)1% | 褐色土、角の丸いロームブロック |
| 2 | 10YR5/4(にぶい黄褐) | 普通 | 比較的あり | 炭化物(～10mm)2%、黄褐色バミス(10～30mm)2%、ロームブロック15% | 褐色土、角のはっきりしたピンクロームブロック |
| 3 | 10YR4/4(褐) | 普通 | ややあり | 炭化物(～10mm)1%、黄褐色バミス(～10mm)1%、ロームブロック7～10%、灰色バミス(～10mm)1% | 褐色土、角のはっきりした黄色ローム |
| 4 | 10YR3/3(暗褐) | 比較的しまっている | 比較的あり | 炭化物(10～20mm)7%、黄褐色バミス(～10mm)3% | ロームの入った褐色土を基本とし炭化物層が入る |
| 5 | 10YR3/4(暗褐) | 比較的しまっている | あり | 炭化物2%、黄褐色バミス(10mm程度)3%、ロームブロック一部混ざる | 黄褐色土、ローム粒 ロームの入った褐色土を基本とし炭化物層が入る |
| 6 | 10YR3/4(暗褐) | やや弱い | 比較的あり | 炭化物2%、黄褐色バミス(～2mm)1% | 床直の混入物の少ない土 |
| 7 | 10YR8/4(透黄橙)～7.5YR8/6(透黄橙) | よくしまっている | かなりあり | | 貼床土 |
| 8 | 10YR4/2(灰黄褐) | 普通 | あり | 炭化物(～10mm)1%、黄褐色バミス(～10mm)1% | |
| A | 10YR4/6(褐) | よくしまっている | かなりあり～比較的あり | 炭化物(～10mm)1%、黄褐色バミス(～2mm)1%、灰色バミス1%、30～40mmの地山ブロック | |
| B | 10YR4/4(褐) | 普通 | 比較的あり | 黄褐色バミス(2mm)1%、灰色バミス1%以下、一部ブロックが混じる | |
| C | 10YR5/6(黄褐) | 比較的しまっている | かなりあり | 炭化物(～10mm)1%、黄褐色バミス(～10mm)1%、灰色バミス1% | |
| D | 7.5YR5/6(明褐) | 弱い | わずかにあり | 灰色バミス1～2% | |
| a | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | 比較的あり | 炭化物(～10mm)1～2%、黄褐色バミス(～10mm)1% | |
| b | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | 比較的あり | 炭化物(5mm)1%、黄褐色バミス(5mm)1% | |
| c | 2.5YR4/6(赤褐) | よくしまっている | あり | 灰色バミス(5mm)1%、黄褐色バミス(2mm)1% | 焼土 |
| d | 10YR7/6(明黄褐) | よくしまっている | かなりあり | ローム | 地山 |

図5 1号住居址(1)



特殊遺構

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|----------------|----------|--------|--|---------------------------------------|
| 1 | 10YR3/3(暗褐) | 弱い | わずかにあり | 炭化物(10~15mm)5%、ノミス(10mm)3%、ローム(5褐色土)炭化物含む mm)1% | 炭化物混 1層と同質、 黄色土粒多 |
| 2 | 10YR3/3(暗褐) | 弱い | わずかにあり | 炭化物(10~15mm)5%、ノミス(10mm)3%、ローム(51層に加えて、ローム塊 mm)1% | (10~20mm)20%、炭 化物混 1層と同質、 黄色土粒多 |
| 3 | 10YR3/3(暗褐) | 弱い | | 炭化物(5mm)5%、赤色、ローム(20mm)1% | 1層と同質、混入物多 い |
| 4 | 10YR3/4(暗褐) | 普通 | あり | ローム(25~30mm)50% | 黄色土のくずれ |
| 5 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | 白色ローム | 4層黄色土 しまりあり 粘性強い黄色土 下面 固い |
| 6 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | よくしまっている | かなりあり | 白ピンクローム | 白色土のくずれ? |

P1

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|----------------|-----|--------|-----------------------------|-----|
| 1 | 10YR4/4(褐) | 弱い | あり | ローム(1~2mm)3%、炭化物(2~8mm)5~7% | |
| 2 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | 弱い | わずかにあり | 柱痕か? | |
| 3 | 10YR5/6(黄褐) | 普通 | しっかりあり | ローム二次堆積 | |

P2a

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|-----|-----|--------|---------------|-----|
| 1 | 暗黄褐 | 弱い | わずかにあり | 炭化物1%、黄色ローム1% | |
| 2 | 暗黄褐 | 弱い | わずかにあり | 炭化物2%、ローム1% | |

P3

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|-------------|-------|--------|-----------------------|-----|
| 1 | 10YR4/4(褐) | | ほとんどなし | 炭化物4% | |
| 2 | 10YR5/8(黄褐) | 1より強い | しっかりあり | 炭化物は1よりも少ないくらいか、炭化物3% | |

P4

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|-----------------------|-------|----|----------|------|
| 1 | 7.5YR4/4(褐) | やわらかい | なし | 炭化物を多く含む | シルト質 |
| 2 | 7.5YR4/4(褐) 1よりわずかに暗い | やわらかい | なし | 炭化物を少し含む | |

P5

| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|----------------------------|-----|-------|--|-----|
| 1 | 7.5YR5/4(褐)~ 10YR4/6(褐) | 強い | あり | 炭化物塊を部分的に含む | |
| 2 | 10YR3/3(暗褐) | 弱い | | 大型炭化物、ローム、焼土粒(5mm)を含む覆土、 炭化物(10mm)、ローム(10~20mm) | |
| 3 | 7.5YR3/4(暗褐) 1より明 るい | | | 混入物2より少ない、炭化物を含む | |
| 4 | 10YR4/4(褐) | 普通 | かなりあり | 混入物の少ない褐色土 | |

図6 1号住居址(2)

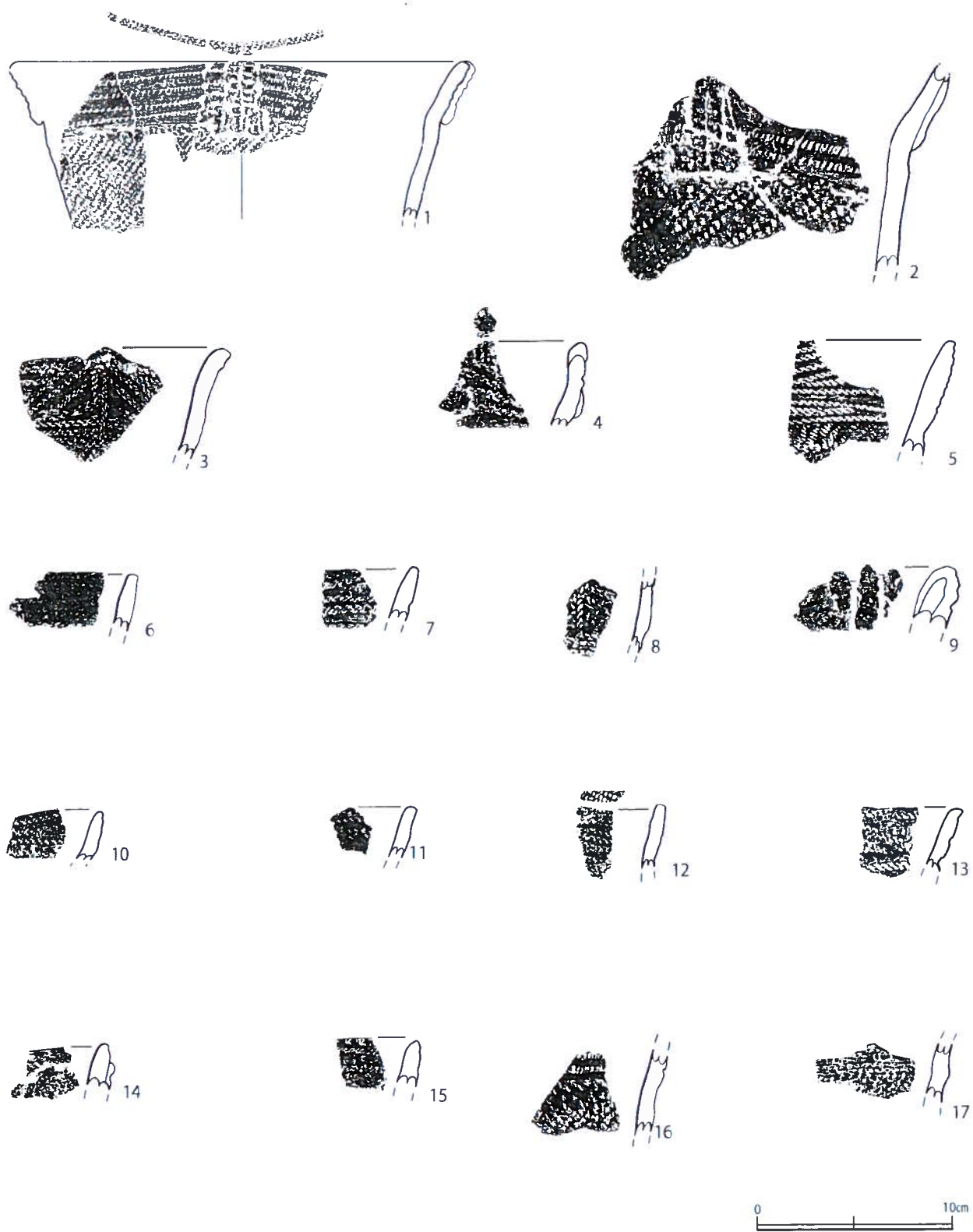


图7 1号住居址出土遺物 1

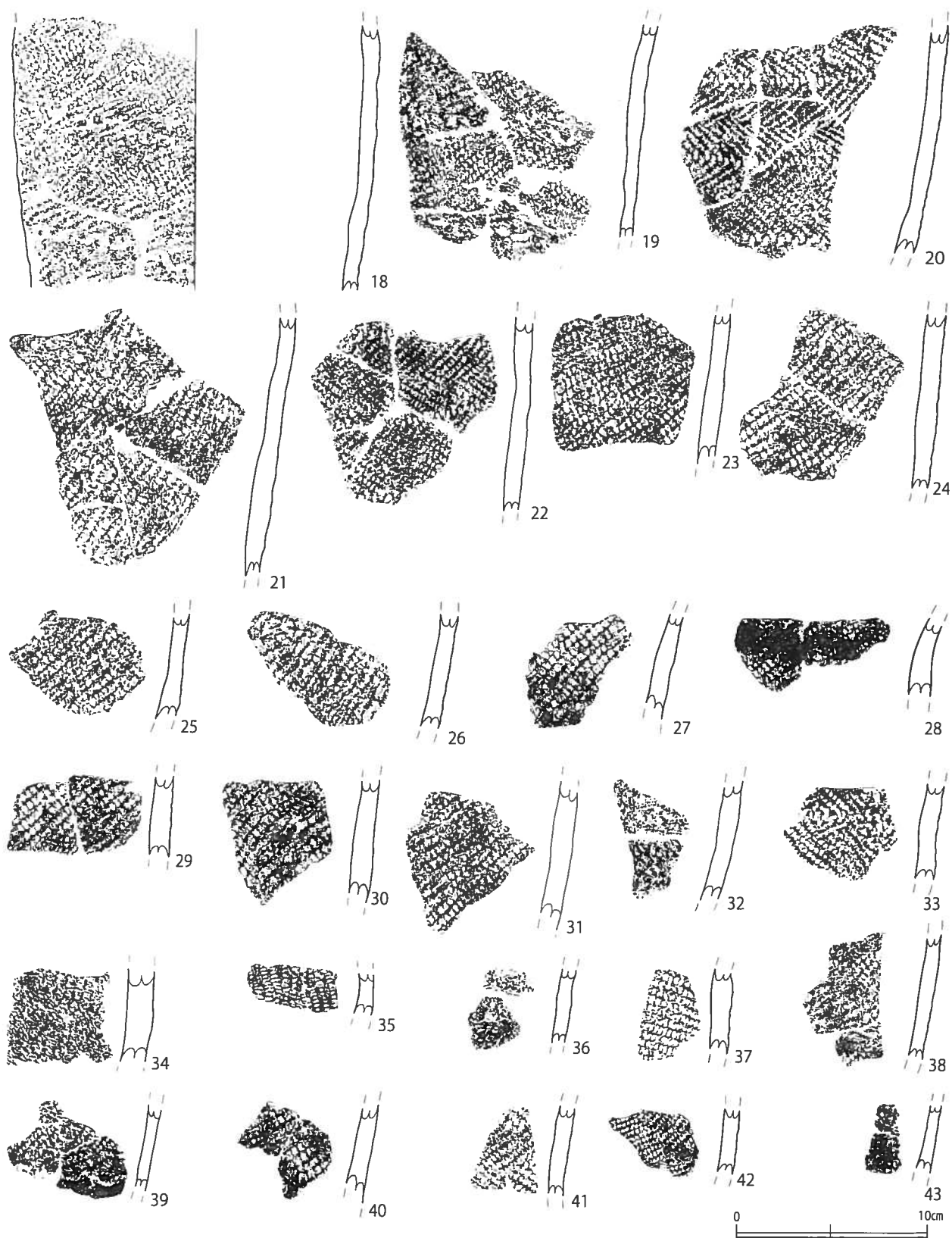


図8 1号住居址出土遺物 2

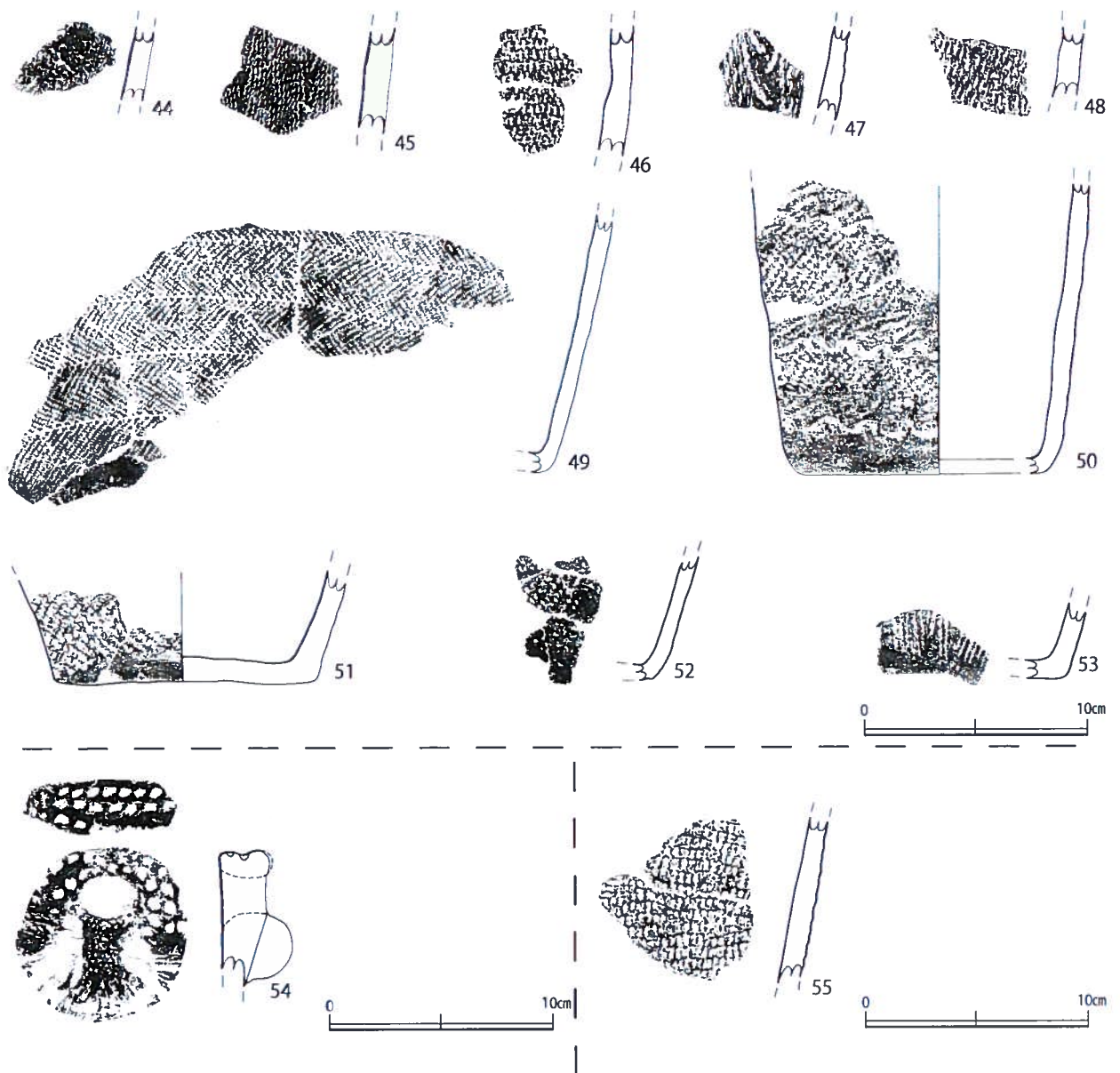


図9 1号住居址出土遺物 3

表2 1号住居址出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|------|----------|----------------------|-----------|-------|-------------|-----|-----|------|------|
| 1 | 口縁 | LR 横位回転? | 多軸綫条体押圧 + 貼付 + LR 押圧 | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 | |
| 2 | 胴部 | | 多軸綫条体押圧 + 貼付 + LR 押圧 | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 | 外面摩耗 |
| 3 | 波状口縁 | なし | LR 押圧 | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 | 波頂部 |
| 4 | 口縁 | 貼付上刻み | LR 押圧 + 円形貼付 | | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 黒褐色 | d2 頃 | |
| 5 | 口縁 | | L 押圧 | 頸部 R 連続押圧 | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 灰褐色 | 灰褐色 | d2 頃 | |
| 6 | 口縁 | LR 横位回転か | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 赤褐色 | d2 | |
| 7 | 口縁 | LR 横位回転 | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 | |
| 8 | 口縁 | LR 横位回転 | LR 押圧 + 刺突 | | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 灰褐色 | 黒褐色 | d2 | |
| 9 | 波状口縁 | なし | LR 押圧 + 貼付 | | ヨコミガキ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 褐色 | 褐色 | d2 | |
| 10 | 波状口縁 | RL 横位回転 | LR 押圧 | | ヨコナデ | 纖維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 | 摩耗 |

| | | | | | | | | | | |
|----|-------------|---------|--|---------------------------|-----------|--------------|---------|---------|------|---------------|
| 11 | 波状口縁 波頂部 | 刻み | L 押圧 | | ヨコミガキ? | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 淡褐色 | d2 | |
| 12 | 口縁 | LR 横位回転 | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 赤褐色 | d2 | |
| 13 | 口縁 | なし | L 押圧、刺突 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 暗褐色 | d2 | |
| 14 | 口縁 | なし | LR 押圧 + 貼付 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 | |
| 15 | 口縁 | なし | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 | |
| 16 | 胴部 | | 多軸綫条体押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 黒褐色 | d2 | |
| 17 | 胴部 | | L 押圧 | | ヨコナデ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 黒褐色 | d2 | 外面炭化物付着か |
| 18 | 胴部 | | | LR 横位回転、下部に結束 | ヨコミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 淡黄褐色 | 暗褐色 | d2 頃 | 内外面炭化物付着 |
| 19 | 胴部 | | | LR 横位回転、下部に結束、中段・下部に結束 | ヨコミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着、底部近くか |
| 20 | 胴部 | | | LR&RL 横位羽状縄文 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 暗褐色 | d2 頃 | 内面摩耗 |
| 21 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 赤褐色～暗褐色 | d2 頃 | |
| 22 | 胴部 | | | LR&RL 羽状縄文横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 褐色 | d2 頃 | 摩耗。内面炭化物付着 |
| 23 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 黒褐色～淡褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 24 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコ・ナナメミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 赤褐色 | d2 頃 | |
| 25 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色～赤褐色 | 褐色 | d2 頃 | |
| 26 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色～淡褐色 | 黒褐色～赤褐色 | d2 頃 | 一部摩耗 |
| 27 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテの雑なミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 内面炭化物付着 |
| 28 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色～赤褐色 | 黒褐色～赤褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 29 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 黒褐色・赤褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 30 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色～赤褐色 | d2 頃 | |
| 31 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 赤褐色 | d2 頃 | |
| 32 | 胴部 | | | LR 横位回転か | タテミガキ | 石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 摩耗 |
| 33 | 胴部 | | | RL 横位回転結束 | タテナデ | 繊維・石英・黒雲母 | 褐色 | 黒褐色 | d | |
| 34 | 胴部 | | | LR 横位回転か | タテミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色～赤褐色 | d2 頃 | |
| 35 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコナデ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 黒褐色 | d2 頃 | |
| 36 | 胴部 | | | LR 横位回転か | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 摩耗 |
| 37 | 胴部 | | | RL 横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | |
| 38 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 39 | 胴部 | | | LR 横位回転、下部に結束 | ヨコナデ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 底部近くか |
| 40 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 黒褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 41 | 胴部 | | | LR&RL 羽状縄文横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色～暗褐色 | d2 頃 | |
| 42 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡赤褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 43 | 胴部 | | | 縄文原体不明 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡褐色 | 淡赤褐色 | d2 頃 | 摩耗 |
| 44 | 底部 | | | LR&RL 横位羽状縄文 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 淡褐色～暗褐色 | d2 頃 | |
| 45 | 底部 | | | LR 横位回転、下部に結束、上部、中段・下部に結束 | ヨコミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | 内外面炭化物付着 |
| 46 | 底部 | | | LR&RL 横位羽状縄文 | ヨコナデ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色～暗褐色 | 淡褐色～赤褐色 | d2 頃 | 内面摩耗 |
| 47 | 底部 | | | LR 横位回転、下部に結束 | ヨコナデ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | |
| 48 | 胴部 | | | 単軸 R 撚糸撚位回転 | 不明 | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡赤褐色 | d1 | 摩耗 |
| 49 | 胴部 | | | 単軸木目状 L 撚糸撚位回転 | ナナメミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d1 | |
| 50 | 胴部 | | | 多軸綫条体撚位回転 | ナデ | 繊維・石英微細粒・金雲母 | 赤褐色 | 淡褐色 | d1 | |
| 51 | 胴部 | | | 単軸 R 撚糸撚位回転 | ナナメミガキ | 繊維・石英微細粒・黒雲母 | 黒褐色 | 淡褐色 | d1 | |
| 52 | 胴部 | | | 単軸 R 撚糸撚位回転か | ナデ | 繊維・石英微細粒・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d1 | |
| 53 | 底部 | | | 単軸 R 撚糸撚位回転 | ナデ | 繊維・石英微細粒・黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡褐色 | d1 | |
| 54 | 口縁一土製品 | 円形刺突 | 円形刺突 & LR 押圧 + 貼付 + LR 縦位中央孔、右端孔か → 下端ケズリ・ナデ | | ナデ | 砂・石英・雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | a? | 側面擦痕、円盤状土製品 |
| 55 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 赤褐色～暗褐色 | d2 頃 | |

込みの内部は、東壁で約 2.1 m、北壁側で約 1.8 mをはかる。このような段状部分は、縄文時代前期末葉の住居に特徴的に見られる、いわゆるテラス状施設ないしベンチ状施設と呼ばれるものである（秦 2002）。炉は住居の中央部で確認された（図 5）。石囲い炉である。図の a～d 層が炉の覆土に相当する。c 層は赤褐色を呈する焼土である。掘り込み部分の北壁部には、床面に U 字状の土手がつき、土手の内部に円錐形の落ち込みを持つ特殊遺構が検出された（図 6）。ベンチ状施設を持つ住居に類例が多い（青森県教育委員会 1998, p.94、95 「第 282 号住居跡」・p.190 「第 287 号住居跡」、青森県教育委員会 2000, p.149 「第 259 号住居跡」、青森市教育委員会 1995, p.11 「第 2 号住居跡」）。特殊遺構の周囲の東側および西側の床面の一部には、白色粘土による貼床が認められた。段構造の内部の床面は、全般に固く踏みしめられていた。

〔重複〕 北東端を 1 号土坑によって切られている。

〔壁面〕 住居の残存壁高は、北側で最も高く、約 25cm を測る。南東部の壁面は、斜面のため検出されなかった。段状部の比高差は、北側で最も大きく約 18cm、南側では 10cm 前後を測る。検出面と段状部床面との比高差は、最大で約 40cm 弱である。

〔堆積土〕 1～8 層が検出された。A～D は、住居南東部の貼床部分である。

（2）出土遺物

1 号住居址からは、円筒下層 d2 式を主体とする縄文土器、および、土製品 1 点が出土した（図 7～9、表 2、写真 31～40）。土器らは例えば八戸市笹ノ沢（2）・（3）遺跡から主体的に出土した円筒上層 a 式の新段階の土器よりも古い特徴をもつ（青森県教育委員会 2001、2003）。口頸部の外反が強く、口縁部に小突起をもち、そこに縦位の隆帯をもつものが多い。また口唇部や隆帯上に押圧縄文が加えられている。これらの特徴をもつことから、円筒下層 d2 式に比定したものが多い（三宅 1994 参照）。55 は柱穴から出土した、円筒下層 d2 式から円筒上層 a 式にかけてと考えられる土器の胴部破片である。

石器 3 点（写真 52 1～3）のうちの 1 は、珪質頁岩製の有茎鏃である（同 1）。下端が破損しているが、基部周辺にアスファルトが付着している。残存縦 3.7cm、横 1.8cm、厚さ 0.6cm、重量 2.9g である。B9-c3 から検出された 2 は、珪質頁岩製であり、縦長の台形状の石器の上および下部が欠損したと考えられる（同 2）。小型の打斧、或いは薄めの石篋の可能性もある。残存縦 3.4cm、横 3.7cm、厚さ 0.8cm、重量 10.7 g である。さらに、P2a から安山岩製と考えられる尖基鏃未成品の可能性の高いものが検出された（同 3）。縦 7.9cm、横 2.6cm、幅 1.3cm、重量 23.6g である。

（3）時期

出土した土器から、円筒下層 d2 式期と考えられる。

3. 遺物集中 (図5、10、11、表3、写真19、41～43)

(1) 遺構の概要

[位置] 遺物集中とは、円筒下層 d2 式から円筒上層 a 式期の土器がまとまって検出された部分を指す (図10、11、表3、写真41～42)。グリッド C 8、9 に位置する (図3、5)。

[遺構の確認の経緯] 1号住居址のプランを確認中に、覆土上部から円筒下層 d₂～上層 a 式土器がまとまって出土したため、遺構番号を付し、微細図を作成した。

[平面形] 南北に約 50cm、東西に約 75cm の範囲である (図10)。

[重複] 1号住居址覆土最上部に位置する。

(2) 出土遺物

円筒下層 d₂ 式から円筒上層 a 式土器を主体とする (図10、11、表3、写真41～43)。口縁部文様の把握できる大破片として検出された1は、口頸部の外反が強く、口縁部に小突起をもち、そこに縦位の隆帯をもつ。口唇部および隆帯上に縄文原体が押圧されている。口縁部の貼り付けなど円筒上層 a 式と類似する特徴があり、円筒下層 d₂ 式から円筒上層 a 式にかけてのものと考えられる (三宅 1994、小笠原 2008 参照)。

(3) 時期

円筒下層 d₂ 式から円筒上層 a 式期と考えられる。

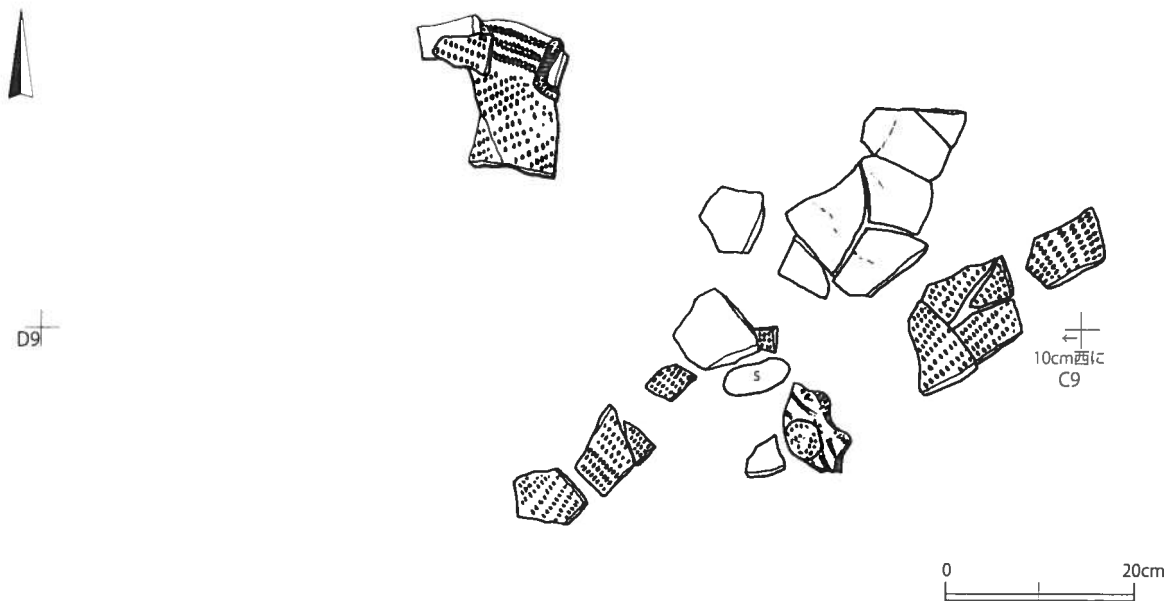


図10 遺物集中

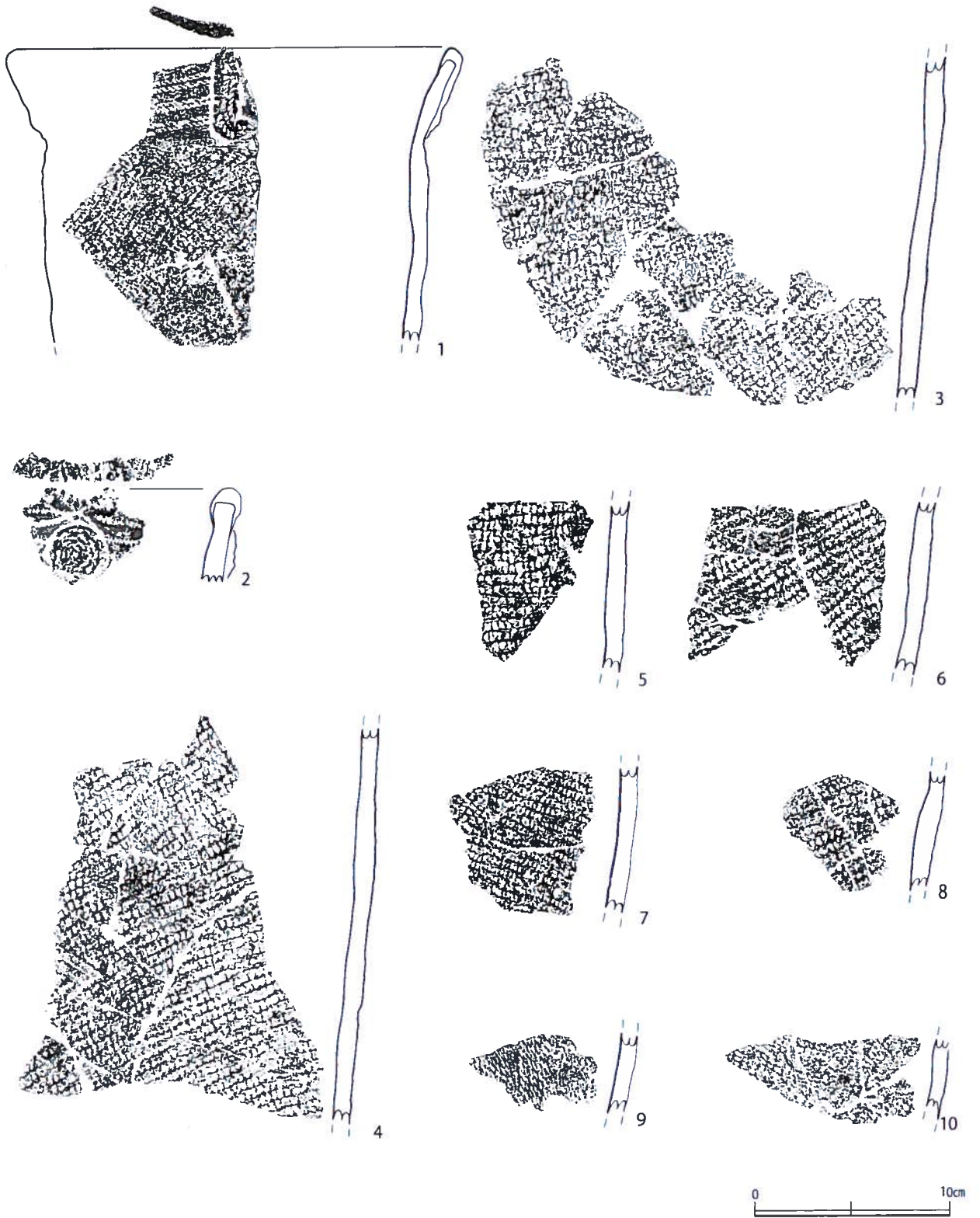


図11 遺物集中出土遺物

表3 遺物集中出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|---------|----------------------|----------------|-------------|-------------|-----------|------------|----------|-------------|
| 1 | 口縁 | LR 横位回転 | L 押圧 | RL 横位 | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 褐色 | d2 ~ a 頃 | 口唇・口縁外炭化物付着 |
| 2 | 口縁 | LR 押圧 | LR 押圧 + 円形貼付 + LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 3 | 胴部 | | | LR 縄文横位回転 | タテミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 赤褐色、明褐色 | 暗褐色 ~ 暗赤褐色 | d2 ~ a 頃 | 内面一部剥落 |
| 4 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコ ~ ナナメミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 明褐色 | d2 ~ a 頃 | 複数遺構からの接合 |
| 5 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 暗赤褐色 | d2 ~ a 頃 | 内面一部剥落 |
| 6 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 褐色 ~ 暗褐色 | d2 ~ a 頃 | 内面一部剥落 |
| 7 | 胴部 | | | LR&RL 羽状縄文横位回転 | タテミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 明褐色 ~ 黒褐色 | 茶褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 8 | 胴部 | | | LR 横位回転 | タテミガキ | 繊維・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 9 | 胴部 | | | 単軸 R 撚糸縦位回転 | ナナメミガキ | 繊維・黒雲母 | 黄褐色 | 暗褐色 ~ 黄褐色 | d1 | |
| 10 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ナデ? | 繊維・石英・黒雲母 | 明褐色 | 褐色 | d2 ~ a 頃 | 内面剥落 |

4. 1号土坑 (図12、13、表4、写真20、44)

(1) 遺構の概要

[位置] 1号土坑は、グリッドB 8、9に位置する(図3)。

[遺構の確認の経緯] 1号住居址の平面プランを確認する過程で、1号住居址を切る小土坑として遺構番号を付した。攪乱の可能性もあるが、覆土はしまりがあった。

[平面形・規模] 長軸約80cm、短軸約50cmを測る(図12)。

[底面] 比較的硬くしまっていた。

[重複] 1号住居址をきっている。

[壁面] 東西軸の断面から明らかな通り(図12)、東側は、垂直に近い壁面を持つ、深さ約15cmの土坑である。西側壁の傾斜は、やや緩やかである。

[堆積土] 覆土は、1層のみで、しまりのある黒褐色土である。

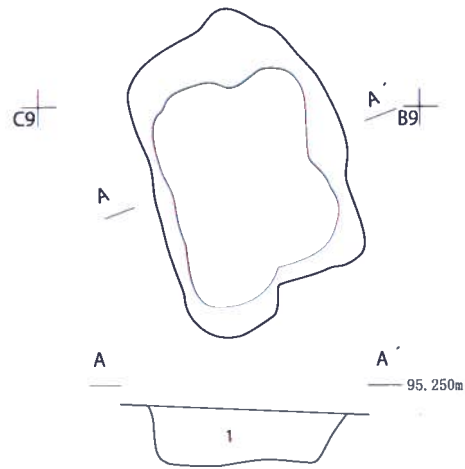
(2) 出土遺物

繊維をわずかに含む胎土や土器片の厚みから円筒下層d2式から円筒上層a式と考えられる土器の胴部破片が出土した(図13、表4、写真44)。

(3) 時期

出土した土器が胴部片1点のみであり、堆積土の色調が他の縄文時代の遺構とは異なることから、時期の比定は差し控えたい。

合子沢松森（4）遺跡



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|---------------|----------|-------|------------------------------------|-----|
| 1 | 7.5YR3/2 (黒褐) | よくしまっている | 比較的あり | ローム (極細粒) 5%、炭化物 (~10mm) 2%、粗粒砂 3% | |

図12 1号土坑



図13 1号土坑出土遺物

表4 1号土坑出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|------|-------|---------|-------|---------------|-----|-----|----------|----|
| 1 | 胴部 | | | LR 横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量・砂・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 黒褐色 | d2 ~ a 頃 | |

5.1 号貯蔵穴（図14、15、表5、写真21～23、45）

（1）遺構の概要

〔位置〕 1号貯蔵穴は、グリッドF9～11、G9～11に位置する（図3）。貯蔵穴の西部は調査区域の外である。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 最小径は円形を呈し、南北の軸が約135cmである。開口部は不定形であるが約210cmの直径をもつ（図14）。

〔壁面〕 10層以下、フラスコ状を呈する。

〔底面〕 検出面から底面までの深さは約130cmである。

〔堆積土〕 1層から59層が検出された。

（2）出土遺物

円筒下層d2式から円筒上層a式にかけての土器のほか、中期後半の土器2破片、蛭沢式をふくむ後期前半の土器3破片が検出された（図15、表5、写真45）。1、2の口縁部は若干肥厚し、口唇部に縄文原体が押圧されている。口縁部の外反はやや強いと考えられ、円筒下層d2式から円筒上層a式にかけての土器である（三宅1994参照）。

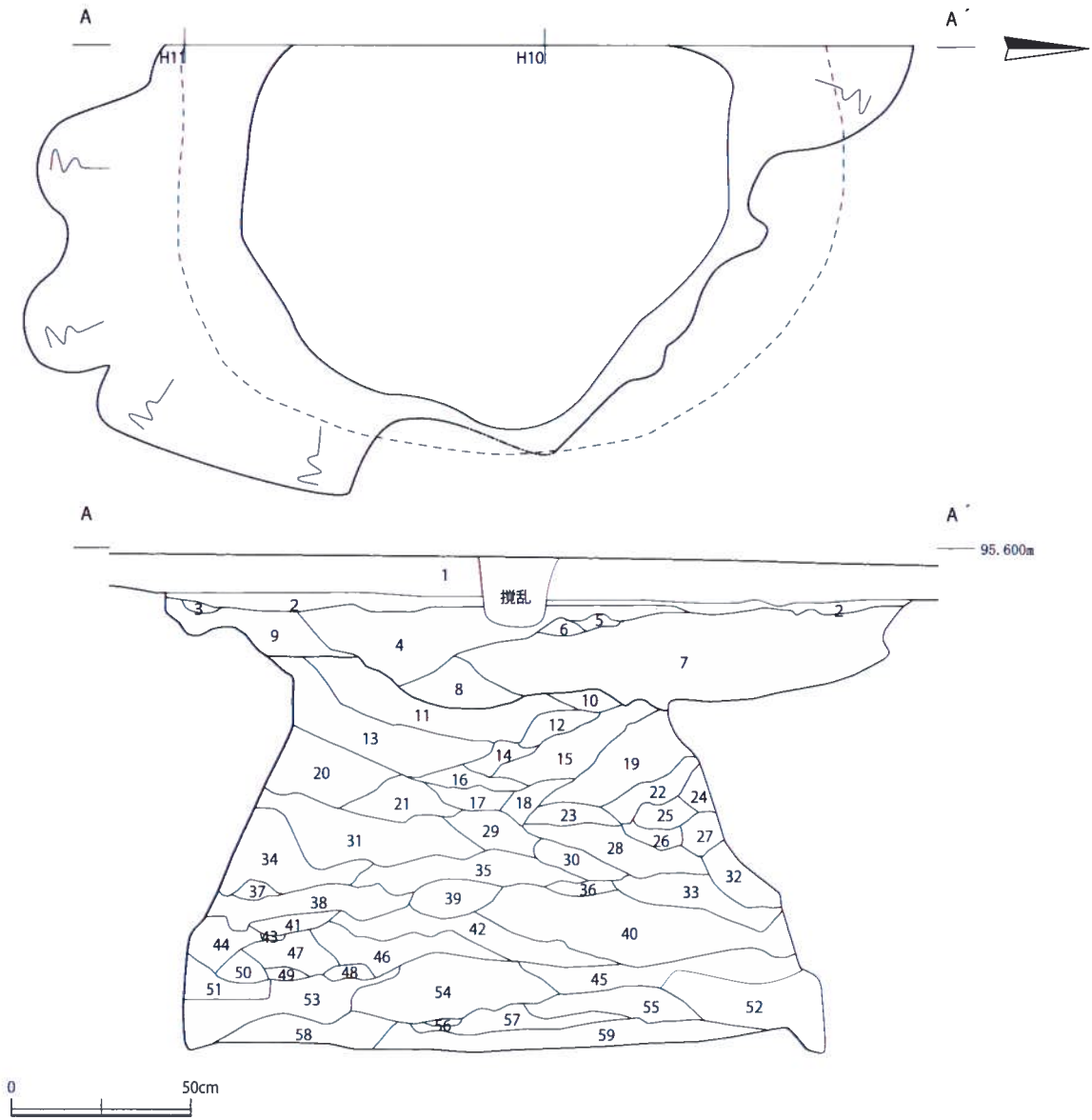
（3）時期

円筒下層d2式から円筒上層a式期に形成された遺構と考えられる。

（4）まとめ

青森市内では、例えば桜峯（1）遺跡（青森市教育委員会1998）で土坑として報告されているものが類例として挙げられる（同、p.92「第36号土坑」など）。

合子沢松森（4）遺跡



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|----------------------------|-----------------|-------|------------------------------------|----------|
| 1 | 表土 下部は客土? | 砂粒やパミスが固くしまっている | | | 図4 1層と同じ |
| 2 | 10YR3/4(暗褐) 色調まちまち | 比較的しまっている | ややあり | ローム(~10mm) 30% | |
| 3 | 10YR4/4(褐)と10YR3/2(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | ローム(~5mm) 10% | |
| 4 | 10YR3/1(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | ローム(~10mm) 5% 砂粒 5% | |
| 5 | 10YR3/3(暗褐) | 比較的しまっている | かなりあり | ローム 40% | |
| 6 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | 比較的しまっている | ややあり | ローム 30% 炭化物 1% 砂粒 5% | |
| 7 | 10YR3/3(暗褐)と10YR2/2(黒褐)の中間 | 比較的しまっている | ややあり | 炭化物 2% パミス(~10mm) 5% ローム 10% 砂粒 5% | |
| 8 | 10YR2/2(黒褐) 4層より少し明るい | 層よりよくしまっている | ややあり | パミス(3mm程度) 5% 砂粒 5% | |
| 9 | 10YR4/4(褐)と10YR3/2(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(~5mm) 5% 炭化物(~5mm) 1% | |
| 10 | 10YR4/4(褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(3mm) 15% | |
| 11 | 10YR3/2(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(~5mm) 5% 石(30mm?) 1個 | シルト質 |
| 12 | 10YR5/4(にぶい黄褐色)に近い | 比較的しまっている | ややあり | パミス 1% 炭化物 1% ローム 3% | |
| 13 | 10YR3/3(暗褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(5mm) 1% 炭化物(5mm) 1% | |
| 14 | 10YR4/4(褐) | 比較的しまっている | ややあり | ローム(5mm) 5% 炭化物(5mm) 3% | |
| 15 | 10YR3/3(暗褐)に近い | 比較的しまっている | ややあり | パミス(5mm) 15% 炭化物(5mm) 1% | |

図 14 1号貯蔵穴

| | | | | |
|----|------------------------------------|------------------------------|--------|--------------------------|
| 16 | 10YR3/1と10YR3/2(黒襦)の中間 | 比較的しまっている | ややあり | バミス(5mm)5%,炭化物(2mm)1% |
| 17 | 10YR4/4(褐)に近い | 比較的しまっている | ややあり | バミス(5mm)5% |
| 18 | 10YR4/4と10YR4/6(褐)の中間的な色調 | 比較的よくしまっているが上部の層と比べると少しやわらかい | かなりあり | バミス(5mm)5% |
| 19 | 10YR4/6(褐)に近い | 比較的しまっているが上部の層ほど固くない | かなりあり | バミス(5mm)3%,炭化物(〜10mm)3% |
| 20 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | やや弱い | 比較的あり | バミス(3mm)1% |
| 21 | 10YR5/4(にぶい黄褐色) | やや弱い | 比較的あり | バミス(3mm)3% |
| 22 | 10YR4/3(にぶい黄褐色) | やや弱い | 比較的あり | バミス(3mm)3% |
| 23 | 10YR4/4(褐) | やや弱い | 比較的あり | バミス(5mm)5% |
| 24 | 10YR4/3(にぶい黄褐色)弱い | | かなりあり | |
| 25 | 10YR5/6(黄褐) | よくしまっている | ほとんどなし | バミス(5mm)3%,砂粒50% |
| 26 | 10YR4/4(褐)に近い。23より少し暗い感じ | やや弱い | 比較的あり | 炭化物(10mm)1% |
| 27 | 10YR4/4(褐)に近い。26より少しだけ明るい | 弱い | 比較的あり | |
| 28 | 10YR4/4(褐)と4/6(褐)の中間 | | かなりあり | バミス(5mm)3% |
| 29 | 10YR4/4(褐)に近い | 比較的しまっている | ややあり | バミス(5mm)3%,炭化物3% |
| 30 | 10YR4/4(褐)と4/6(褐)28よりも少しかたい | | 比較的あり | |
| 31 | 10YR4/6(褐) | やや弱い | かなりあり | バミス(5mm)3%,炭化物3% |
| 32 | 10YR4/4と4/6(褐)の中間・28よりも暗い | | 比較的あり | |
| 33 | 10YR5/6(黄褐)と10YR4/6(褐)両方みられる | 比較的しまっている | 比較的あり | ローム(20mm)10% |
| 34 | 7.5YR4/4(褐) | 弱い | 比較的あり | バミス(10mm)3% |
| 35 | 10YR4/4(褐) | 比較的しまっている | 比較的あり | バミス(5mm)5%,炭化物5% |
| 36 | 10YR4/4と10YR4/6(褐)の中間・35よりも少しだけ明るい | 弱い | 比較的あり | バミス(5mm)1%,炭化物1% |
| 37 | 10YR5/4(にぶい黄褐)と10YR5/6(黄褐)の中間 | 比較的しまっている | ややあり | |
| 38 | 10YR5/4(にぶい黄褐)に近い | 弱い | 比較的あり | |
| 39 | 10YR5/4(にぶい黄褐)に近い・38とよく似る | よくしまっている | 比較的あり | 炭化物(5mm)3% |
| 40 | 10YR4/6(褐)に近い | 弱い | かなりあり | 炭化物3% |
| 41 | 7.5YR5/6(明褐)に近い | 弱い | かなりあり | |
| 42 | 10YR5/4(にぶい黄褐)と10YR5/6(黄褐)の中間 | やや弱い | 比較的あり | 炭化物3% |
| 43 | 38に近い | | | |
| 44 | 10YR4/4(褐)に近い | 弱い | 比較的あり | ローム(5mm)3%,炭化物3% |
| 45 | 10YR4/4(褐)に近い | やや弱い | 比較的あり | ローム(20〜30mm)20% |
| 46 | 10YR4/3(にぶい黄褐)と10YR3/3(暗褐)の中間 | 弱い | 比較的あり | ローム(10mm)5% |
| 47 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | 弱い | 比較的あり | バミス(10mm),ローム(10mm)15% |
| 48 | 10YR4/4(褐)に近い | 弱い | 比較的あり | |
| 49 | 48とほとんど同じ | | | |
| 50 | 10YR5/4(にぶい黄褐)に近い | 弱い | 比較的あり | ローム(20mm)20% |
| 51 | 10YR5/4(にぶい黄褐)に近いが50より少し暗い | 弱い | 比較的あり | ローム(10mm)20% |
| 52 | 10YR4/6(褐) | 比較的しまっている | 比較的あり | ローム(50mmのものを含む)5〜10% |
| 53 | 3/3(暗褐)に近い | 比較的しまっている | 比較的あり | バミス・炭化物3%,ローム(10mm)20% |
| 54 | 10YR4/4(褐)と10YR3/4(暗褐)の中間 | 比較的しまっている | 比較的あり | 炭化物(10mm)5%,ローム(10mm)20% |
| 55 | 55によく似るが少しだけ暗い感じ | 比較的しまっている | かなりあり | ローム(10mm)30% |
| 56 | 10YR2/2(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | |
| 57 | 10YR3/2(黒褐) | 比較的しまっている | 比較的あり | バミス(数個)3% |
| 58 | 10YR3/3(暗褐) | 比較的しまっている | 比較的あり | バミス5% |
| 59 | 10YR3/4(暗褐) | 比較的しまっている | ややあり | バミス3% |

図14-2 1号貯蔵穴

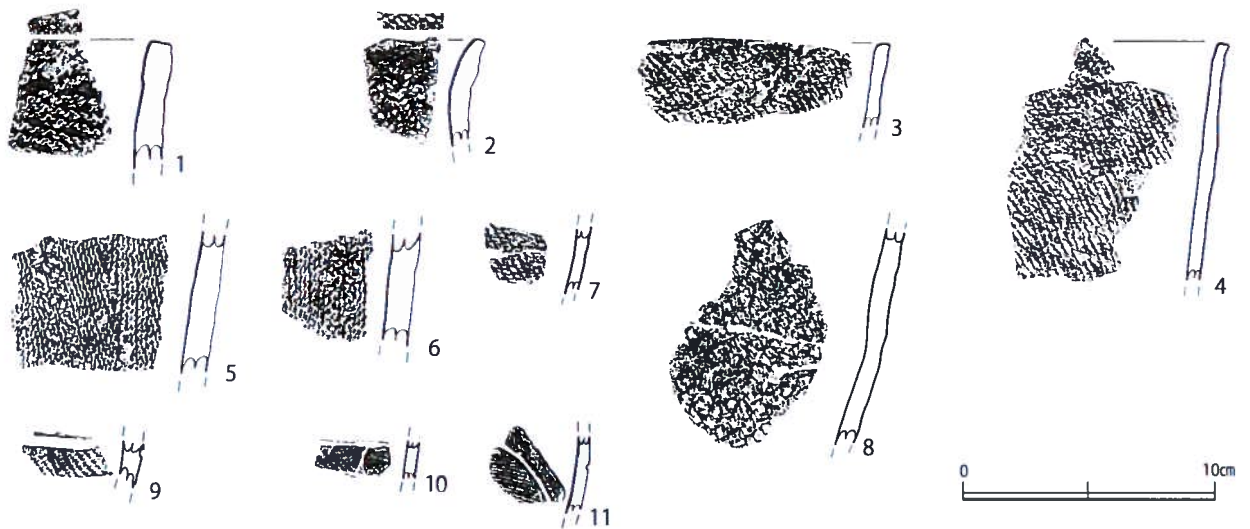


図15 1号貯蔵穴出土遺物

表5 1号貯蔵穴出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|-------|-------------------------------|--------------------------------|--------|--------------|--------|---------|----------------------|----|
| 1 | 口縁 | LR 押圧 | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 赤褐色 | 暗褐色 | d ₂ ~ a 頃 | |
| 2 | 口縁 | LR 押圧 | 口縁直下に LR 押圧、下部は RL 横位回転、上端に結節 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 暗褐色 | 褐色 | d ₂ ~ a 頃 | |
| 3 | 口縁 | | L 縦 | | ヨコミガキ | 石英・黒雲母 | 褐色～暗褐色 | 褐色～暗褐色 | 中期後半～後期後半 | 薄手 |
| 4 | 口縁 | | L 縦 | | ヨコミガキ | 石英・黒雲母 | 褐色～暗褐色 | 褐色～暗褐色 | 中期後半～後期後半 | 薄手 |
| 5 | 胴部 | | | 単軸木目状 L 撻糸縦位回転、結節 | ナナメミガキ | 繊維、砂、石英 | 淡褐色～褐色 | 黄褐色 | d | |
| 6 | 胴部 | | | 単軸木目状 L 撻糸縦位回転、結節 | ナナメミガキ | 繊維、砂、石英 | 淡褐色～褐色 | 黄褐色 | d | |
| 7 | 胴部 | | | LR 縦位回転か | ミガキ | 砂・石英 | 暗褐色 | 暗褐色 | 不明 | |
| 8 | 胴部 | | | LR 縄文 | ヨコミガキ | 繊維・黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色～黒褐色 | d ₂ ~ a 頃 | |
| 9 | 胴部 | | | RL 縄文横位 + 横位沈線 2 本 | ヨコミガキ | 砂・黒雲母 | 灰褐色 | 黄褐色 | 後期堂沢 | |
| 10 | 胴部 | | | RL 縄文横位 + 横位並行沈線間縦位弧状沈線 + 磨り消し | ヨコミガキ | 混入物少ない（細砂少量） | 淡褐色 | 褐色 | 後期 | 薄手 |
| 11 | 胴部 | | | LR 縄文横位 + 横位沈線 + 磨り消し | ナナメミガキ | 混入物少ない（細砂少量） | 淡褐色 | 淡褐色 | 後期 | 薄手 |

6. 2号貯蔵穴（図 16、17、表 6、写真 24～27、46、47）

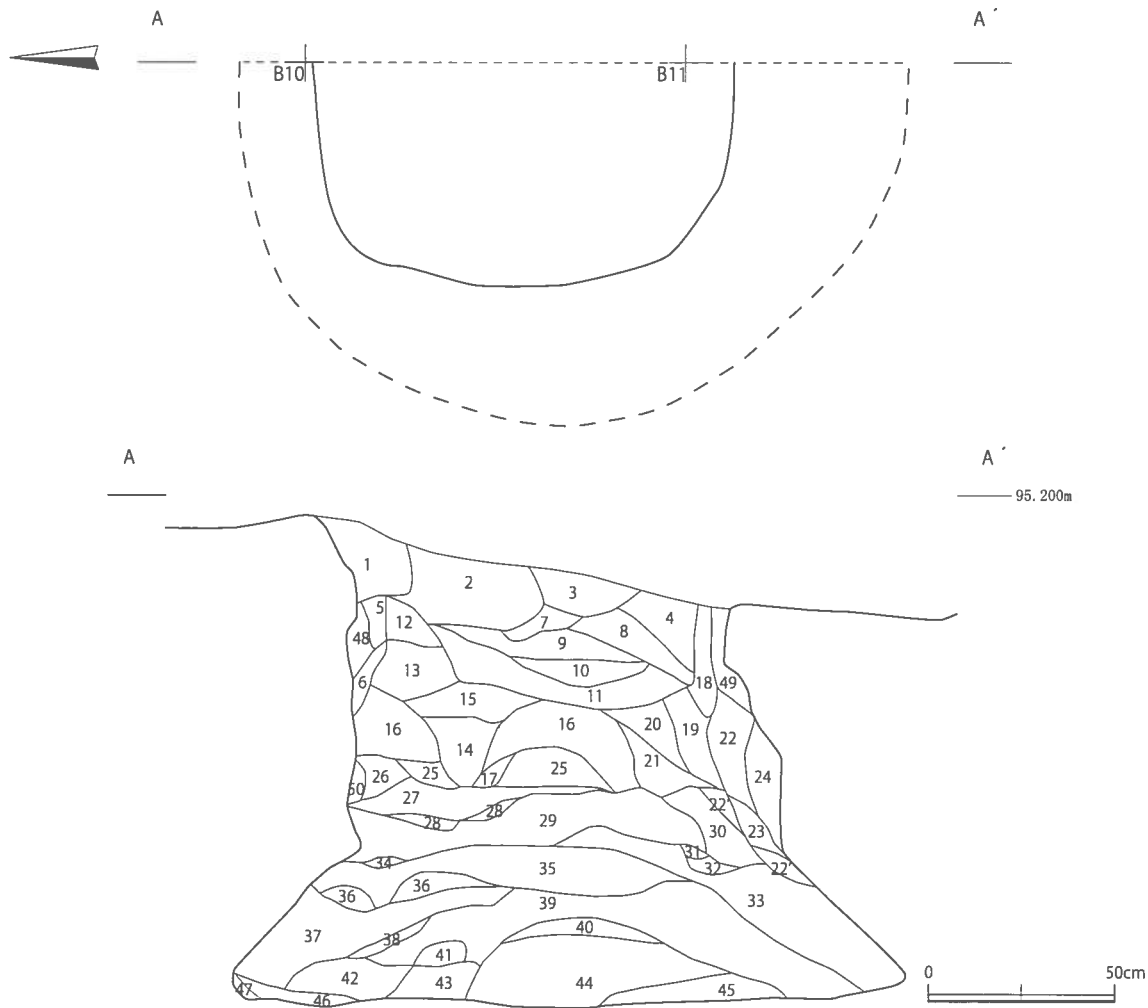
（1）遺構の概要

〔位置〕 2号貯蔵穴は、グリッド B 9～11 に位置する（図 3）。貯蔵穴の西半部のみ発掘した。

〔平面形・規模〕 南北軸に約 110cm の直径をもつ円形を呈するものと考えられる（図 16）。

〔底面〕 検出面から底面までの深さは約 130cm である。

〔重複〕 1号住居址との切り合い関係は明確ではないものの、貯蔵穴の覆土の状態からは、



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | 表土 | その他 |
|----|----------------|-----------|--------|--------|--------------------------------------|-------|
| 1 | 10YR4/2(灰黄褐) | 弱い | しまり | わずかにあり | | |
| 2 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物片土器混じり2%,パミス(10~20mm)2% | 土器混じり |
| 3 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | | 黄褐色ブロックあり1%,パミス(2~4mm)1% | |
| 4 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)1%,パミス(2~4mm)2% | |
| 5 | 10YR5/8(黄褐) | 弱い | かなりあり | | 壁崩落、パミス(2~10mm) | |
| 6 | 10YR5/8(黄褐) | 弱い | かなりあり | | 壁崩落、パミスなし | |
| 7 | 10YR2/2(黒褐) | やや弱い | あり | | パミス(~2mm)1% | |
| 8 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物1%,パミス(2~10mm)2% | |
| 9 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)2%,パミス(10~20mm)1% | |
| 10 | 10YR2/2(黒褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)2%,パミス(10~20mm)1% | |
| 11 | 10YR2/2(黒褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)2%,パミス(2~10mm)2% | |
| 12 | 10YR2/3(黒褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)2%,パミス(2~10mm)1% | |
| 13 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)1%,パミス(10~mm)2% | |
| 14 | 7.5YR4/3(黒褐) | 普通 | ややあり | | 炭化物(10mm~)3%,パミス(10~mm)1% | 土器 |
| 15 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)1%,パミス(2~10mm)1% | |
| 16 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物(10~mm)2%(地山ブロック含む),パミス(10~mm)3% | |
| 17 | 黄橙褐 | 比較的しまっている | 比較的あり | | 地山でブロック | |
| 18 | 10YR5/4(にぶい黄褐) | 普通 | 比較的あり | | 炭化物(~10mm)1%,パミス(10~mm)2% | |
| 19 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | | 炭化物(~10mm)2%,焼土(赤ブロック)混、パミス(10~mm)3% | |
| 20 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | | 炭化物(10~mm)3%,焼土(赤ブロック)混、パミス(~2mm)1% | |
| 21 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | | 炭化物2%,焼土混じり、パミス(2~10mm)1% | |
| 22 | 10YR5/8(黄褐) | 弱い | しっかりあり | | | |
| 23 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | 弱い | わずかにあり | | | |
| 24 | 黄橙褐 | 普通 | かなりあり | | 壁崩落 | |
| 25 | 10YR4/6(褐) | 普通 | 比較的あり | | 炭化物(~10mm)地山ブロック1%,パミス(2~10mm)3% | |

図16 2号貯蔵穴

合子沢松森（４）遺跡

| | | | | |
|----|--------------|------|--------|---------------------------------|
| 26 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | しっかりあり | 炭化物(～10mm)1%、バミス(2～10mm)1% |
| 27 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | 炭化物・土器混じり5%、バミス(2～10mm)1% |
| 28 | 黄橙褐 | 弱い | 比較的あり | 壁崩落土 |
| 29 | 10YR4/4(褐) | 普通 | あり | 炭化物3%、バミス(10～mm)3% |
| 30 | 10YR4/4(褐) | | あり | 炭化物2%、バミス(2～10mm)1% |
| 31 | 10YR4/4(褐) | | 比較的あり | バミス(2～10mm)1% |
| 32 | 黄橙褐 | | しっかりあり | |
| 33 | 10YR2/3(黒褐) | やや弱い | ややあり | 炭化物10%、バミス(10～mm)2% |
| 34 | 10YR2/3(黒褐) | | わずかにあり | 炭化物50% |
| 35 | 10YR4/4(褐) | 普通 | ややあり | 炭化物5%、バミス(10～mm)3% |
| 36 | 黄褐 | 弱い | 比較的あり | 地山ブロックを多く含む、バミス混じり1% |
| 37 | 10YR3/3(暗褐) | 普通 | あり | 炭化物を含む、地山ブロック含む1%、バミス(2～10mm)1% |
| 38 | 10YR6/8(明黄褐) | 弱い | ほとんどなし | バミス(10～mm) |
| 39 | 10YR3/2(黒褐) | 普通 | あり | 炭化物5%、バミス(10～mm) |
| 40 | 10YR5/6(黄褐) | 弱い | かなりあり | バミス |
| 41 | 黄橙褐 | 強い | | |
| 42 | 10YR5/6(黄褐) | やや弱い | ややあり | バミス(10～mm) |
| 43 | 10YR4/4(褐) | やや弱い | ややあり | 炭化物(～10mm)2% |
| 44 | 黄橙褐 | やや弱い | しっかりあり | |
| 45 | 10YR5/6(黄褐) | 弱い | かなりあり | |
| 46 | 黄橙褐 | 弱い | しっかりあり | |
| 47 | 黄橙褐 | 弱い | 比較的あり | |
| 48 | 黄橙褐 | 強い | | |
| 49 | 10YR5/6(黄褐) | 弱い | わずかにあり | バミス(10～mm) |
| 50 | 10YR5/6(黄褐) | やや弱い | あり | バミス(10～mm) |

図 16-2 2号貯蔵穴

その上面に1号住居址が構築された可能性は低い。したがって新旧関係は、1号住居址が古く2号貯蔵穴が新しい可能性が高い。

〔壁面〕 断面はフラスコ状を呈する(図16)。

〔堆積土〕 1層から50層が検出された。炭化材や炭化種子などの有機物、焼土を多量に含む土層は、住居址床面など生活の場から集められた廃棄物の2次堆積である可能性が高い。

(2) 出土遺物

円筒下層 d2 式から円筒上層 a 式を主体とする縄文土器が出土した(図17、表6、写真46、47)。口頸部の外反が強く、口縁部に小突起をもち、そこに縦位の隆帯をもつものが多い。また口唇部や隆帯上に押圧縄文が加えられている。さらに、口縁部と胴部とを区画する隆帯が加えられている。口縁部には、横位の縄文原体押圧が並列しており、円筒下層 d2 式に比定した(三宅1994参照)。なお、図17-1の土器については、残存脂質分析に供した後の拓本である(出土状況については写真27を参照)。

(3) 時期

円筒下層 d2 式から円筒上層 a 式期に廃棄され、比較的短期間で埋まったものと考えられる。

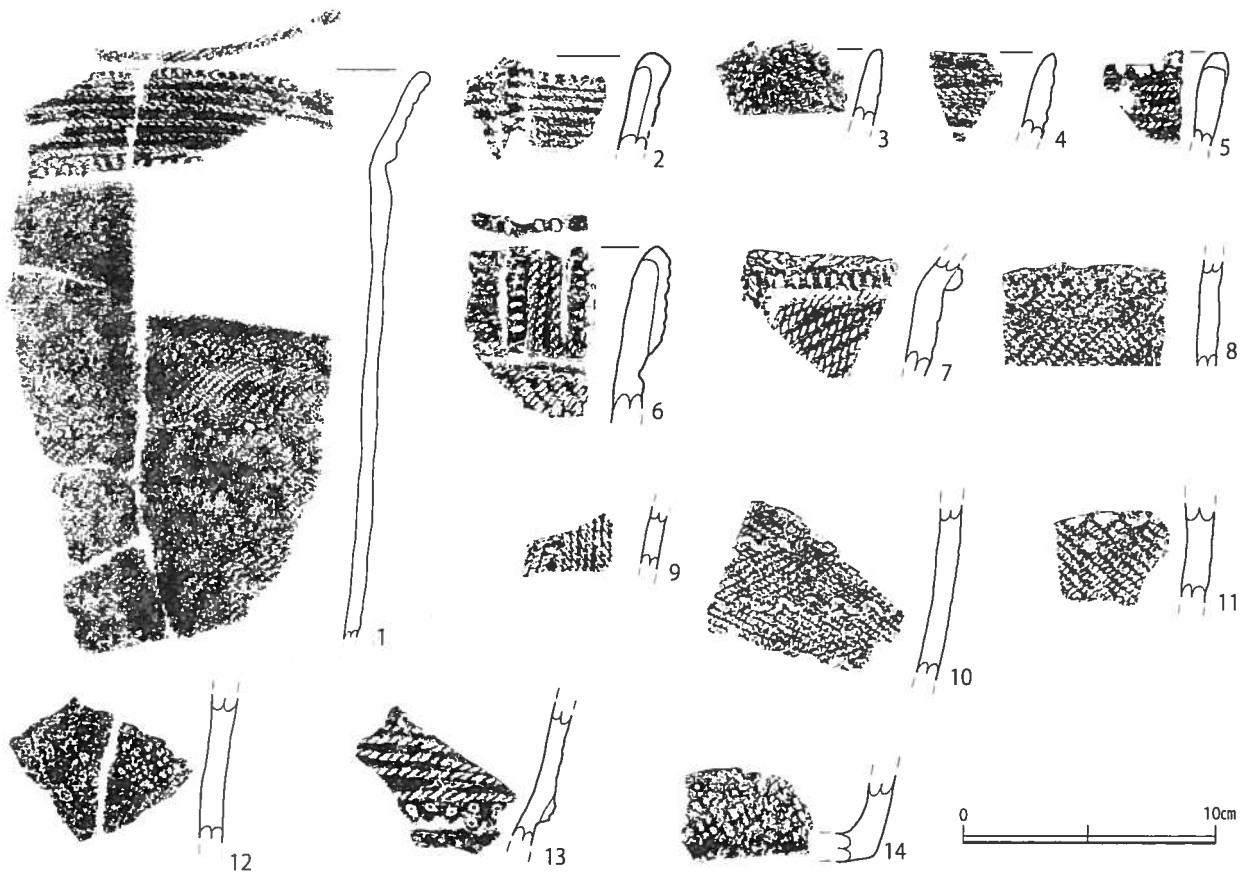


図17 2号貯蔵穴出土遺物

表6 2号貯蔵穴出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面顔登 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|-------------|------------------------------|-------------------------|----------|-------------|---------|---------|----------|-------------|
| 1 | 口縁 | 外側面に爪形刺突 | LR押圧横位、下部に横位隆帯+爪形刺突 | LR横位回転、結束 | ヨコ・ナナメガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 赤褐色~暗褐色 | 赤褐色~暗褐色 | d2 ~ a 頃 | 内外面下部に炭化物附着 |
| 2 | 口縁 | 不明原体押圧による刻み | 垂下隆帯、L押圧 | | ヨコミガキ? | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 黒褐色 | d2 ~ a 頃 | 内面摩耗 |
| 3 | 口縁 | LR横位回転か | LR押圧横位 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 暗赤褐色 | d2 ~ a 頃 | 波状口縁波頂部 |
| 4 | 口縁 | | LR押圧 | | ヨコナデ? | 繊維、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 黄褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 5 | 口縁 | 棒状工具刻み | RL押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 6 | 口縁 | 棒状工具刻み | LR押圧+隆帯+棒状工具による刻み | 上端にLR押圧横位圧痕一条、下部にRL横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 赤褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 7 | 胴部 | | 単軸R攪系横位回転、縦位隆帯+刻み、下端に横位隆帯+刻み | 単軸R攪系押圧 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 8 | 胴部 | | | LR横位回転 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 明褐色 | 明褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 9 | 胴部 | | | 単軸R攪系縦位回転 | ナナメガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 明褐色 | 黒褐色 | d1 | |
| 10 | 胴部 | | | LR&RL 横位羽状縄文、結束 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 明褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 11 | 胴部 | | | RL横位回転、結束 | ヨコナデ | 繊維、石英、黒雲母 | 明褐色 | 明褐色 | d2 ~ a 頃 | |
| 12 | 胴部 | | | LR横位回転 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 明赤褐色 | 赤褐色 | d2 ~ a 頃 | 摩耗 |
| 13 | 胴部 | | RL押圧、下部に横位隆帯+円形竹管刺突 | RL横位回転 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 ~ a 頃 | 外面炭化物附着 |
| 14 | 底部 | | | LR横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 ~ a 頃 | |

7. 3号貯蔵穴（図 18、19、表 7、写真 28、48）

（1）遺構の概要

〔位置〕 調査区の北東端部、グリッド A 7、8、B 7 で確認されたが、大部分は A 7 に含まれる（図 3）。

〔遺構の確認の経緯〕 遺構検出後、南西部の 1 辺 40cm の範囲を、厚さ 5cm ずつ、土壌をサンプリングしつつ掘り下げた。掘り下げた範囲が狭かったため、70cm ほど掘り下げた時点で以下の掘り下げが困難になった。ここまでの調査で遺物が少量出土し、縄文時代の遺構一形態・規模と深さから貯蔵穴と推定一であることが判明した。本遺跡におけるその他の貯蔵穴の事例から遺構はかなり深いものであると考えられること、掘り下げる部分を拡張すると、本遺構を切っている住居の床面を掘り抜く必要があること、調査日程が十分ではないことなどから判断して、以下の掘り下げは行なわなかった。

〔平面形・規模〕 北西部が水道管の埋設によって攪乱されており、また、南東部を 2 号住居址によって大きく切られているため正確な平面形態は不明である。残存部は不整形であるが、楕円形もしくは隅丸長方形などの整った形状を呈していたものと思われる。1 辺の長さは残り具合の良好な部分で 1 m 程度あり、この程度もしくはこれよりやや大きい規模であると推定できる。

〔底面〕 底部までの掘り下げを行っていないため、底面の形状ならびに検出面から底面までの深さは不明である。

〔重複〕 南東部分を 2 号住居址によって切られている。

〔壁面〕 完掘していないため壁の形状の全容は不明である。既掘部分の形状からは、比較的直に近い立ち上がりと言えるが、フラスコ状に広がる部分もあるため、フラスコ形の貯蔵穴と考えている。

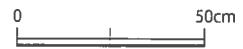
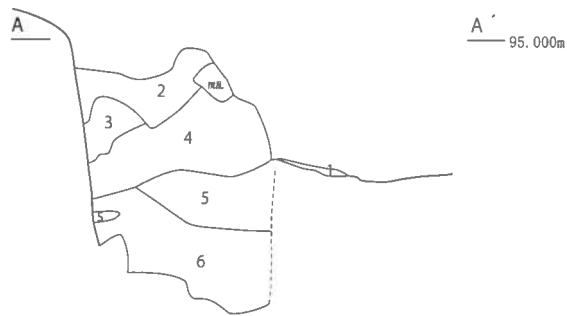
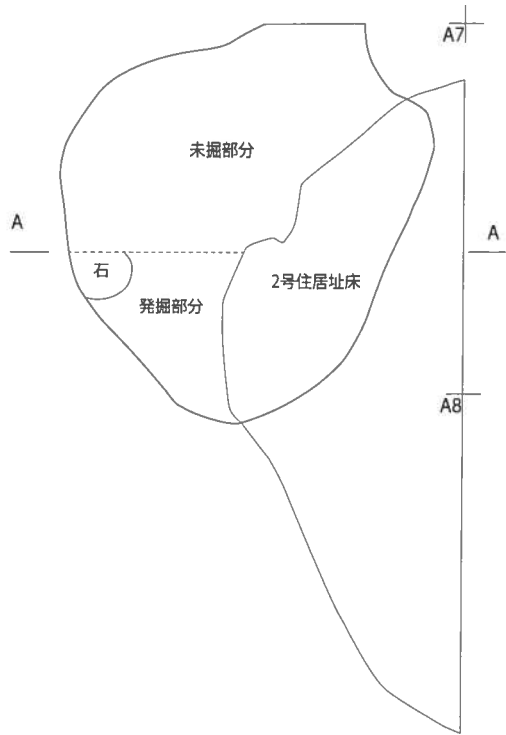
〔堆積土〕 掘り下げを行なったところまでで 6 枚の層を認識した。堆積状況はレンズ状とは積極的に言えないことから、人工的な埋戻しを否定はできないと思われる。埋土は基本的にロームに由来すると考えられ、2、4、5、6 層は赤みを帯びている。

（2）出土遺物

いずれも既掘部分の上～中位からの出土である。出土遺物はいずれも円筒下層 d2 式の範疇に含まれる。

（3）時期

本遺構は完掘しておらず、遺構の時期を示すと判断できる出土遺物は無いが、土器の口縁部破片は、口頸部の外反が強く、口唇部に押圧縄文が加えられている。口縁部には横位の縄文原体の押圧が加えられており、円筒下層 d2 式の範疇に含まれる（三宅 1994 参照）。



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----------------------------|----|-----------|--------|------------------------------------|--|
| 1 貼床 75YR5/4(にぶい褐) | | よくしまっている | かなりあり | 炭化物(5mm)5% | 75YR5/4のローム層(地山)土を主体とする平安住居?のはり床。縄文遺構の埋土上に位置するため必要だったと理解 |
| 2 75YR4/3(褐) | | やや弱い | ややあり | バミス(微細)3%、炭化物(微細)3% | シルト質 |
| 3 75YR5/8(明褐)と75YR4/8(褐)の間 | | よくしまっている | なし | バミス(5mm)3% | ロームに由来するものと思われるが砂っぽい |
| 4 75YR4/4(褐)に近い2層より少し明るい | | 比較的しまっている | ややあり | バミス(10mm)3%、小石(20mm)1個、炭化物(10mm)2% | |
| 5 75YR4/3(褐)に近い。比較的しまっている | | | わずかにあり | バミス(10mm)5%、炭化物(5mm)3%、小石(15mm)1個 | シルト質 |
| 6 70.5YR4/4(褐) | | 弱い | ややあり | バミス(10mm)3%、炭化物(5mm)3% | |

図18 3号貯蔵穴

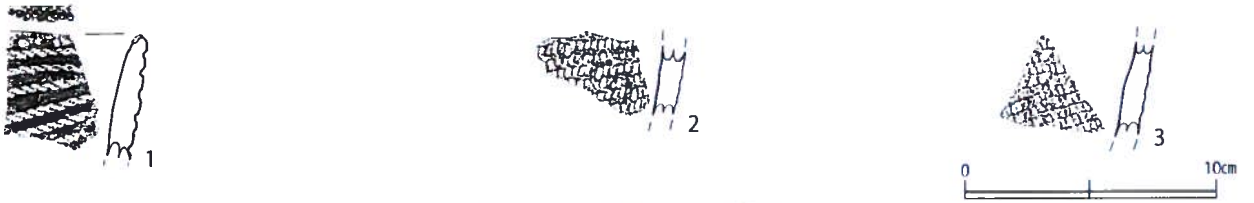


図19 3号貯蔵穴出土遺物

表7 3号貯蔵穴出土遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|-------|-------|--------|-------|-------------|------|-----|----|--------|
| 1 | 口縁 | RL 押圧 | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗赤褐色 | 黒褐色 | d2 | |
| 2 | 胴部 | | | LR横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 黒褐色 | 淡褐色 | d2 | 3と同一個体 |
| 3 | 胴部 | | | LR横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 淡褐色 | d2 | 2と同一個体 |

8. 遺構外 (図 20、表 8、写真 49、52)

遺構外からは、縄文土器及び石器が検出された。縄文土器は、円筒下層 d2 式を中心に後期の土器 1 破片も出土した (図 20、表 8)。口頸部の外反が強く、口縁部に小突起をもち、そこに縦位の隆帯をもつものが多い。また口唇部や隆帯上に押圧縄文が加えられている。これらの特徴をもつ土器については、円筒下層 d2 式に比定した。石器は、珪質頁岩製のサイドスクレーパーと考えられる削器が検出された (写真 52 5)。縦 5cm、横 3.7cm、厚さ 0.9cm、重量は 21.3g である。

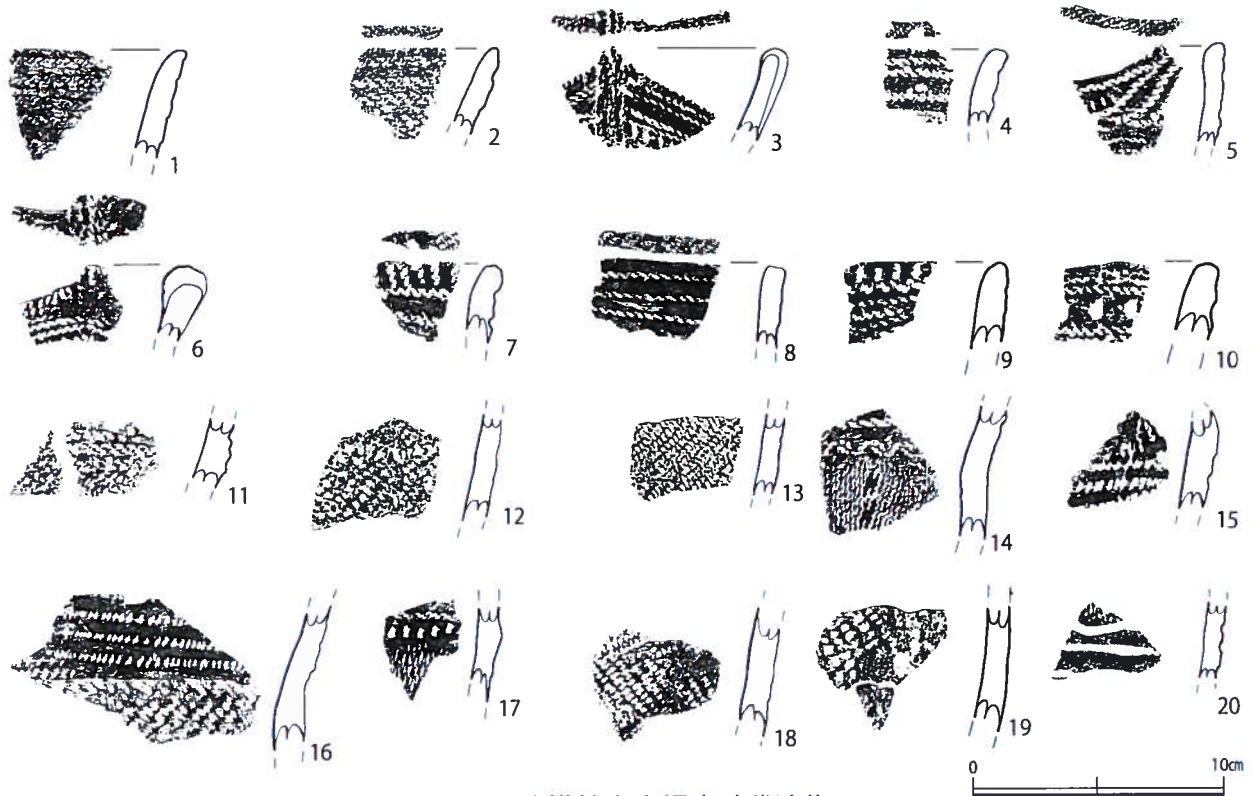


図20 遺構外出土縄文時代遺物

表8 遺構外出土縄文時代遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|----------|---------------------------|-------------------------|--------|-------------|---------|---------|------|------------|
| 1 | 口縁 | なし | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 褐色 | 明褐色 | d2 | 外面炭化物付着 |
| 2 | 口縁 | RL? 押圧? | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維・砂・石英 | 淡褐色 | 褐色 | d2 頃 | 外面炭化物付着 |
| 3 | 口縁 | R 押圧 | L 押圧横位 & 縦位 + 縦位貼付 + L 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡赤褐色 | d2 | 波状口縁波頂部 |
| 4 | 口縁 | RL 押圧 | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 淡赤褐色 | 暗赤褐色 | d2 | |
| 5 | 口縁 | L 縦位回転 | L 押圧 + 爪形刺突 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 暗褐色 | d2 | |
| 6 | 口縁 | 突起上 R 押圧 | L 押圧 & R 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 明赤褐色 | 明赤褐色 | d2 | 波状口縁波頂部 |
| 7 | 口縁 | LR 横位回転 | L 押圧口縁直下縦位、下部横位 | | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 赤褐色 | 赤褐色 | d2 | 内面一部剥落 |
| 8 | 口縁 | RL 縦位回転 | LR 押圧横位3条 | | ヨコナデ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色～暗褐色 | 淡褐色 | d2 | |
| 9 | 口縁 | | 口縁直下押圧文、LR 押圧横位 | | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 暗褐色 | 淡褐色 | d2 | |
| 10 | 口縁 | | L 押圧横位2条、C字状押圧文、L 押圧横位2条 | | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡赤褐色 | 淡赤褐色 | d2 | |
| 11 | 胴部 | | LR 押圧 | | ヨコミガキ | 繊維微量・石英・黒雲母 | 黒褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | |
| 12 | 胴部 | | LR 横位回転結束 | | ナデ | 繊維、石英、黒雲母 | 褐色～赤褐色 | 褐色～赤褐色 | d2 頃 | |
| 13 | 胴部 | | LR 横位回転結束 | | ナデ | 繊維、黒雲母 | 黒褐色～赤褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | |
| 14 | 胴部 | | LR 押圧横位 | 上端に結節横位、単軸木目状 L 撻系縦位回転、 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 灰褐色 | 灰褐色 | d1 | 外面に炭化物付着 |
| 15 | 胴部 | | 多軸綫条体押圧 | 単軸木目状 L 撻系縦位回転 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 明赤褐色 | 明赤褐色 | d2 頃 | |
| 16 | 胴部 | | 多軸綫条体押圧 | LR & RK 羽状縄文横位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 暗褐色～赤褐色 | 暗褐色～赤褐色 | d2 頃 | 外面に炭化物少量付着 |
| 17 | 胴部 | | LR 押圧 + 低い横位隆帯上に爪形刺突 | 単軸木目状 L 撻系縦位回転 | ヨコミガキ | 繊維微量、石英、黒雲母 | 灰褐色～黄褐色 | 灰褐色～黄褐色 | d2 頃 | |
| 18 | 胴部 | | | LR & RL 羽状縄文 | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 頃 | |
| 19 | 胴部 | | | RL 横位回転 | ナナメミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 暗褐色 | d2 頃 | |
| 20 | 胴部 | | へら状工具による沈線文 | | ミガキ | 砂、石英 | 黄褐色 | 赤褐色 | 後期 | 沈線内に炭化物付着 |

第2節 平安時代

1. 遺構の概要

主な平安時代の遺構としては、1軒の住居址（2号住居址）が検出された。

2. 2号住居址（図21～23、表9、写真29、30、50～52）

（1）遺構の概要

〔位置〕 調査区の北東端部付近、グリッドA7、8で確認された（図3）。本遺構の大半は調査区外へと続く。

〔遺構の確認の経緯〕 調査区の北東部を掘り下げる過程で、赤化した土の広がりを確認（A7区）したため、Feature 4と名づけ平面実測図を作成した。しかし、その範囲は明確ではなかったため周囲もいっしょに掘り下げたところ、隅丸の方形を呈すると思われるプランを確認でき、これをFeature 20と呼んだ（A7、8区）。Feature 4はFeature 20（2号住居址）内に、平面的にも高さ的にも完全に含まれることから、2号住居址と同一の遺構と考えたほうが良いと判断した。

確認されたプランが比較的良好な方形であること、赤化した土壌は熱を受けたことによるものと考えられ、それが方形プラン隅の1ヶ所にだけ存在していたことから、カマドに関連するものであると推定した。また、掘り下げの過程で縄文土器に加えて、平安時代の土器・須恵器が出土することなどから、平安時代の住居跡の可能性を念頭において調査を進めた（2号住居址）。

〔平面形・規模〕 調査区内では、北東—南西方向に約1m×北西—南東方向に約1.2mの範囲を確認できたものの、本遺構の大半は調査区外へと続くため、正確な形状や規模を知ることはできない。しかし、調査部分からは隅丸方形のプランを推定できる。

〔底面〕 床面から検出面までの高さ（壁高）は北側で約55cm、南側で約45cmであり、地山まで掘り込まれた底面（床面）は北に向かってやや下がっている。

〔重複〕 3号貯蔵穴と重複している。2号住居址が3号貯蔵穴の平面プランを切っているため2号住居址の方が新しい。

〔堆積土〕 本遺構に伴うと考えられる埋土を8層（図21 7～14層）に分層した。8・9層が熱を受けたと思われることから、カマドに関連するものと推定した。地山面よりも幾分高い位置であるのはこれらが、本来の位置から移動したことによると考えている。

全体としては傾斜しつつ堆積しているように見える。埋土を観察した部位は、遺構の隅に相当することから、遺構全体の堆積状況についての判断はできない。しかし、カマドに関連すると推定した土の移動も含めて、人工的な埋戻しの可能性を示すものかもしれない。

北西隅の、3号貯蔵穴を切っている部分で、硬くしまった土が確認され、貼り床の可能性を指摘できる。この部分にのみ確認されたのは、貯蔵穴の埋土が地山に比べて軟らかかったため、何らかの対応が必要だったからであろう。

〔壁面〕 調査した部分および断面には確認できなかった。

〔柱穴〕 調査部分からは、柱穴と判断できる遺構は確認できなかった。

〔カマド〕 熱を受けて赤変した土の位置から、住居北西壁面に、カマドが存在していた可能性を指摘できる。しかし、構造や規模については不明である。また、カマドに伴うような石材も確認できていない。

(2) 出土遺物

2号住居址からは平安時代の土器や須恵器がある程度まとまって出土した。加えて、本遺構は、縄文時代の3号貯蔵穴や包含層を切っているため、縄文時代の遺物も出土している。出土遺物の内訳は石器1点、縄文土器4点、土師器もしくはその可能性が高いもの27点、須恵器2点である。石器は尖基鏃である(写真52-4)。上端が破損している。残存縦3.9cm、横1.4cm、厚さ0.4cm。重量3.0g。珪質頁岩製である。

遺物のうち、床面に近い部位や被熱した土壌中から出土したものがいくつか見られた(図23-2、5など)。これらについては、遺構が使用された時期を知る手がかりになる可能性がある。

1は須恵器の甕の口縁部～頸部にかけての破片である。口径は約18cmと推定できる。口唇部が凹んでおり、外面の口縁端部付近に細い突帯が巡る。内外面の調整とも回転ナデで、内面全体に薄く自然釉がかかっている。五所川原窯跡群のMD16号窯出土資料(五所川原市教育委員会2003)に類似したものが見られることから、同窯跡群後期段階のものと考えられる。

2は須恵器の長頸壺の口縁部で、口径約6cmと推定できる。強く外反しながら口唇部に至り、口唇部は指でつまむように整形されたためか、内面に弱い稜線が見られる。外面の口唇部下に1条の突帯が巡るが、指によるつまみ出しか貼り付けたものなのかは判断できない。調整は回転ナデと思われるが、回転のスピードが遅いためか明瞭な痕跡は残っていない。形態的な特徴から五所川原窯跡群の後期段階のものと考えられる。

3は土師器(黒色土器)の杯の口縁部小破片である。ごくわずかに内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸味を帯びる。外面調整は回転ナデ、内面調整は縦方向のミガキ後、横方向のミガキである。

4は土師器の杯の底部～胴部にかけてで、底径は6cmに復元できる。体部はほぼ直線的に立ち上がる。外面底部付近の調整はヘラケズリ、内面調整はミガキで、底部には糸切痕が残る。

5は土師器の甕の口縁部小破片で、口径は約16cmに復元できる。口縁部はやや外反しつつ端部に至る。調整はヘラ状工具によるナデや指によるナデであると思われる。

6は甕の口縁部から胴部にかけての小破片である。口径の約1/12が残り、口径14～17cmほどに復元できる。口縁部は短く外反し、口唇部は丸みを帯びる。外面はヨコナデ後、

下方には縦方向のヘラケズリと思われる調整が施される。内面調整はヨコナデ後、斜め方向のヘラナデによる。調整痕の特徴から非ロクロ系と考えられる。

7は小甕の口縁部～胴部にかけての小破片で口径は9.8cmほどに復元できる。口縁部は短く外反し、口唇部は丸味を帯びる。口縁部外面はヨコナデ、その後上半には横方向のヘラケズリあるいはヘラナデが、下半には縦方向のヘラケズリもしくはヘラナデが施される。内面調整はヨコナデである。厚さは5mmと薄手で、焼成はきわめて良好である。

8は小型の甕の底部～胴部にかけてである。底径の約1/3が残り、底径は6cmに復元できる。外面調整は縦方向のヘラケズリ、内面調整は横位のヘラナデによると思われる。内面に凹凸が見られる。調整痕の特徴から非ロクロ系と考えられる。また、色調・焼成具合・ヘラ痕跡の類似性から、2と同一個体である可能性が高い。図示していないが、この小型甕と同一個体の可能性が高い頸部の小破片が他に1点ある。

9は小型の甕の底部の破片である。底径の約1/4が残り、底径は5cmに復元できる。外面調整は縦方向のヘラナデもしくはヘラケズリ、内面調整は横位のヘラナデによると思われる。全体的な調整は5に似るが、底径が異なるため別個体と考えられる。

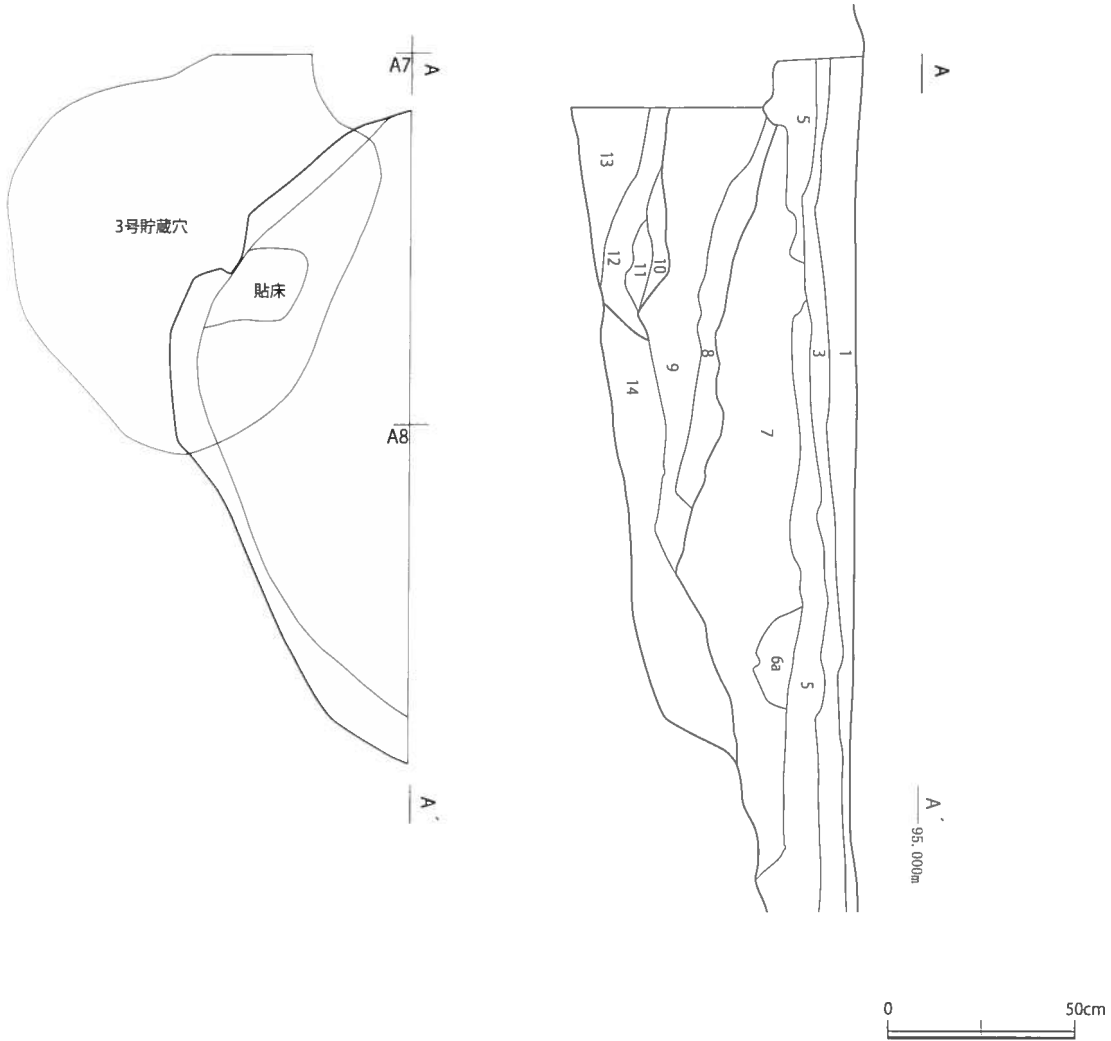
（3）時期

土師器は時期が推定できるものは、多くが10世紀の前半代に位置づけられる。須恵器も五所川原窯跡群の後期段階に相当すると考えられることから、10世紀前半以降の年代を推定できる。

また、遺構埋土の上層部から出土したトチノキの種皮2点について放射性炭素年代測定が実施された。その結果については改めて学術論文として発表する予定であるが、1点がcal AD 899-918・962-1015（1シグマ）、もう1点がcal AD 897-922・942-991（1シグマ）である。10世紀初め頃から前半もしくは10世紀中頃から11世紀初めにかけての時期であり、これは遺物から推定できる年代観と矛盾しない。

（4）まとめ

出土遺物はいずれも破片であり、出土状況からも遺構の時期を直接示してくれるものは出土していないが、遺物の年代はおおむね10世紀代ものと考えられた。この年代は、遺構の所属時期というよりも、本遺構を含む遺跡の存続時期の一端を示しているのかもしれない。その場合、近接する野木遺跡と一部併存していたことになる。野木遺跡で確認された竪穴住居は壁溝を持つものが多く、カマドは東や南方向に作られるものが多いことなど、本遺構と異なる点もあり、両者の関係について関心がもたれる。



| 層名 | 色調 | しまり | 粘性 | 混入物 | その他 |
|----|--|-----------|----------------|--|--------------------------|
| 1 | 10YR4/2(灰黄褐) | 弱い | しまり | わずかにあり | 25 表土 |
| 3 | 7.5YR3/1(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり | パミス(細粒) 5~7%, 砂質(上部に灰色の砂) ~30% | 25 表土層、上、明褐色、 下、混入物多種 |
| 5 | 7.5YR3/1(黒褐) | やや弱い | ややあり | 小礫(細粒) 2% | 小礫まじりの表土層 |
| 6 | 10YR2/1(黒) | 比較的しまっている | わずかにあり | パミス(5mm) 1%, ローム(10mm) 5% | シルト質 |
| 7 | 10YR2/2と10YR3/2(黒褐)の中間。場所によってはロームを多く含むため10YR4/4(褐)を呈する | | | | |
| 8 | 10YR3/3(暗褐) | よくしまっている | わずかにあり | パミス(5mm) 3%, 炭化物(5mm) 3%, ローム(30mm) 5% | シルト質 |
| 9 | 10YR3/2(黒褐) | 比較的しまっている | ややあり(8層より強い感じ) | 炭化物(5mm) 3%, ローム(~30mm) 10% | 色調は部位によりかなり異なる |
| 10 | 10YR3/4(暗褐)に近い | やや弱い | ほとんどなし | ローム(微細) 5~10% | 熱を受けたため?赤みを帯びている。シルト質 |
| 11 | 5YR4/3(にぶい赤褐) | やや弱い | ほとんどなし | 炭化物(微細) 5% | 焼土?シルト質 |
| 12 | 7.5YR3/3(暗褐) | 比較的しまっている | わずかにあり | 炭化物(10mm) 3%, ローム(微細) 10% | シルト質 |
| 13 | 7.5YR4/4(褐) | 比較的しまっている | ややあり | 11,12層はロームを主体とする層と思われる | |
| 14 | 10YR4/3(にぶい黄褐) | 比較的しまっている | わずかにあり | パミス(5mm) 3%, 炭化物(10~mm) 3%, ローム~10% | シルト質 |

図21 2号住居址

合子沢松森（4）遺跡

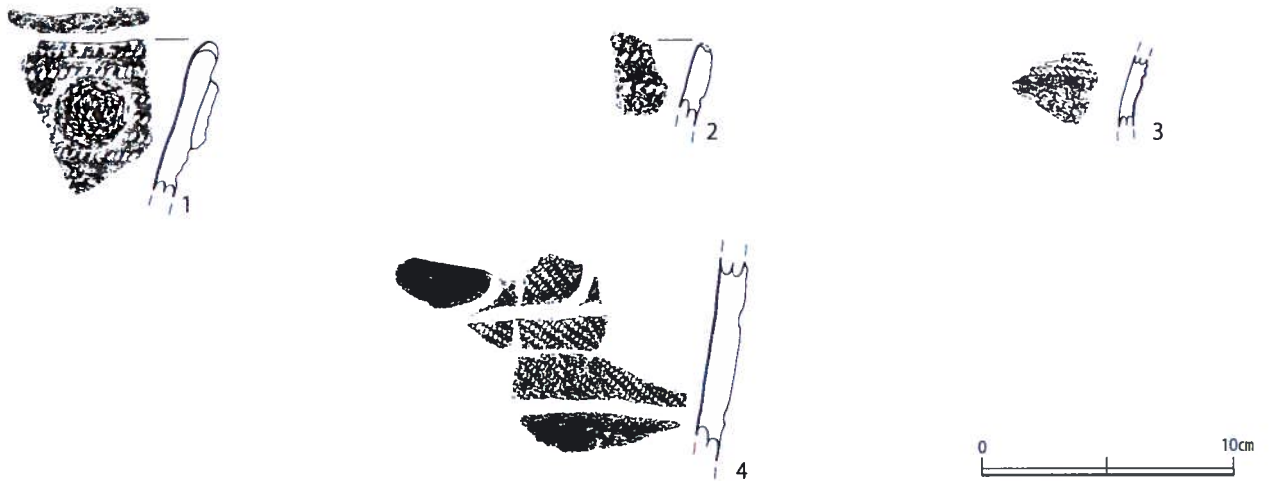


図22 2号住居址出土縄文時代遺物

表9 2号住居址出土縄文時代遺物観察表

| No. | 部位 | 口唇文様 | 口頸部文様 | 胴部下半文様 | 内面調整 | 胎土 | 外面色 | 内面色 | 分類 | 備考 |
|-----|----|------|------------------|------------------|-------|-----------|-----|-----|---------|-------------|
| 1 | 口縁 | L押圧 | 多軸絡糸体押圧+円形貼付+R押圧 | | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 ~ a頃 | 2と同一個体 |
| 2 | 口縁 | | 多軸絡糸体押圧 | | ヨコミガキ | 繊維、石英、黒雲母 | 淡褐色 | 淡褐色 | d2 ~ a頃 | 1と同一個体 外面摩耗 |
| 3 | 胴部 | L押圧 | RL織位回転 | | ヨコミガキ | 石英・黒雲母 | 暗褐色 | 暗褐色 | d2 ~ a頃 | |
| 4 | 胴部 | | | RL縄文横位回転+へら沈線+磨消 | ナデ | 石英・黒雲母 | 黄褐色 | 黄褐色 | 後期 | |

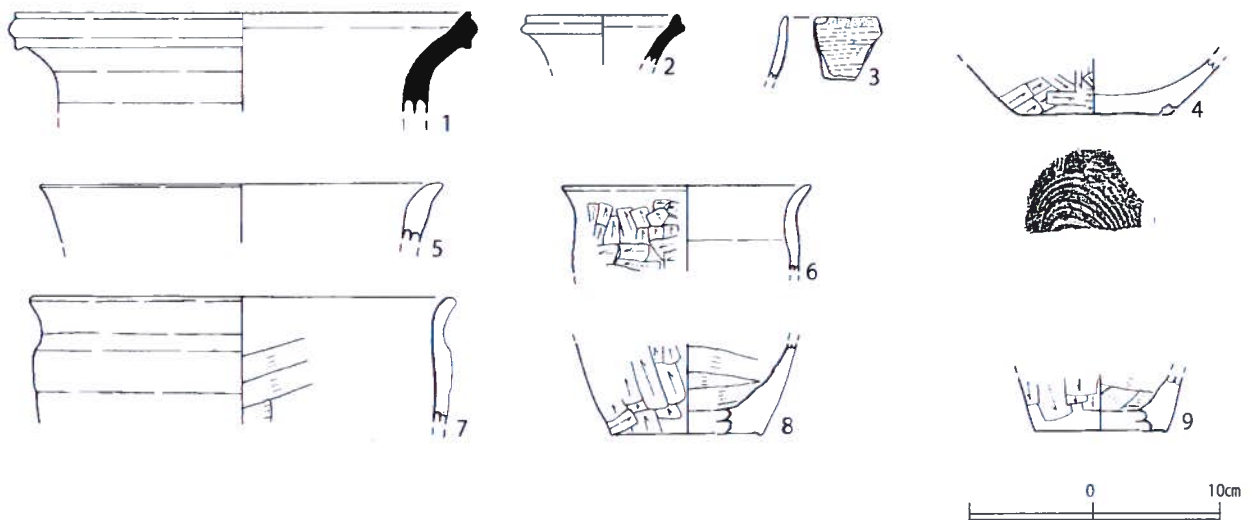


図23 2号住居址出土平安時代遺物

3. 遺構外 (図24、写真51)

1はグリッドA12から出土した。甕口縁部の小破片で、外反しながら端部に至る。口唇部には凹みが見られ、外面口唇端部付近がやや鋭く突出する。器壁はかなり薄い。外面調整は口縁端部付近がナデ、その下にはヘラケズリが施される。内面調整はナデである。なお、本資料の出土地点は、2号住居址からはやや離れている。

2は小型甕の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部径の約1/8が残り、口径は約6cmに復元できる。やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近でわずかに外方に屈曲して端部に至る。口唇部は丸みを帯びる。外面は凹凸がかなり顕著である。外面調整は口縁端部付近がナデ、胴部にはヘラもしくは指による縦方向のナデが施されたと考えられる。内面調整はナデによる。

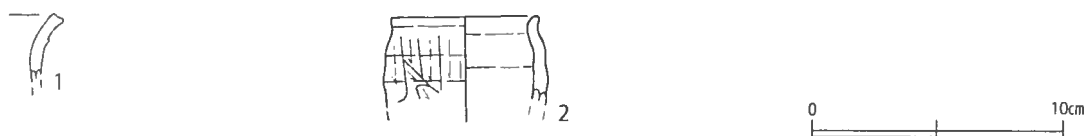


図24 遺構外出土平安時代遺物

引用・参考文献

青森県教育委員会, 1998: 三内丸山遺跡X (第3分冊) 青森県埋蔵文化財調査報告書第250集。

青森県教育委員会, 2000: 三内丸山遺跡X V 青森県埋蔵文化財調査報告書第283集。

青森県教育委員会, 2001: 笹ノ沢(2)・(3)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第305集。

青森県教育委員会, 2003: 笹ノ沢(3)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第346集。

青森市教育委員会, 1995: 横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第24集。

青森市教育委員会, 1998: 桜峯(1)遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第36集。

青森市教育委員会, 2000: 野木遺跡発掘調査報告書II 青森市埋蔵文化財調査報告書第54集。

小笠原雅行, 2008: 円筒上層式土器。総覧 縄文土器, pp.344-351。

五所川原市教育委員会, 2003: 五所川原須恵器窯跡群 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集。

秦光次郎, 2002: 住居。青森県史 別編 三内丸山遺跡, pp.65-82。

三宅徹也, 1994: 円筒土器。縄文土器I 縄文文化の研究第3巻, pp.177-189。

第3章 植物遺存体の分析（概報）

伊藤 由美子

1. はじめに

第1章第4節で述べたとおり、炭化植物遺存体の選別を主な目的として、遺構の覆土を体系的に採取し、フローテーション法を用いて（写真10）、ライト・フラクション（L F；上面に浮いた内容物）とヘビー・フラクション（H F；沈殿した内容物）の両者について、2mmと1mmのメッシュで内容物の回収を行った。その方法については第1章第4節に記載したとおりであるため省略する。さらにここでは出土した炭化植物遺存体について種類について記載し、数量および考察は別途論文で発表する予定である。

2. 出土炭化植物遺存体

(1) 1号住居址

住居址内堆積土中および床面から、下記の植物遺存体が出土した。

- オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.)
- クリ (*Castanea crenata* Sieb.et Zucc.)
- ウルシ科 (Anacardiaceae)
- ウルシ属 (*Toxicodendron*)
- トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)
- ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley)
- ニワトコ属 (*Sambucus*)
- ガマズミ属 (*Viburnum*)
- スゲ属 (*Carex*)
- タデ科 (Polygonaceae)

(2) 2号住居址

堆積土中およびカマド堆積土中から、下記の植物遺存体が出土した。

- ウルシ科
- ウルシ属

トチノキ
タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Blume ex Graebn)
ミズキ
ニワトコ属
ガマズミ属
タデ科
イネ (*Oryza sativa* L.)
ヒエ属 (*Echinochloa*)
アワ (*Setaria italica*(L.) P. Beauv.)

(3) 1号・2号貯蔵穴

人為的に廃棄されたと推定される堆積土中から、下記の植物遺存体が出土した。

オニグルミ
クリ
ウルシ科
ウルシ属
ミズキ
タラノキ
ニワトコ属
ガマズミ
スゲ属
タデ科



図 25 2008 年調査時出土のオニグルミ



図 26 2008 年調査時出土のクリ

第4章 総括

羽生 淳子

以上、合子沢松森（4）遺跡における発掘調査の成果について、出土遺構・遺物を中心に報告した。第1章第3節で述べたように、今回の発掘調査の主たる研究目的は、三内丸山遺跡周辺に位置する円筒式期の小集落を発掘することにより、この時期における遺跡間の機能差を検討するための資料を蓄積することであった。発掘調査の結果、1号住居址は縄文時代前期末の円筒下層d₂式の時期に比定された。1号貯蔵穴と2号貯蔵穴からも、ほぼ同一時期の土器が出土した。3号貯蔵穴についても、遺構上部のみの発掘であるが、出土土器3点は、他の遺構出土資料とほぼ同時期と考えられる。発掘面積が42m²と狭いため、本遺跡の全容は不明だが、近隣の横内（1）遺跡、桜峯（2）遺跡などと同様に、住居が数軒程度の小規模な集落であり、その居住期間も比較的短期間であった可能性が高い。この他に、調査区域内で検出された平安時代（AD10世紀頃）の住居址一軒についても発掘を行なった。

大型炭化植物遺存体については、今回は概報のみとし、最終成果は、別途、学術論文として報告の予定である。フローテーション法を用いることにより、本遺跡のような台地上の非低湿地遺跡においても、オニグルミの核やクリの果皮、トチノキの種皮等、堅果類の炭化破片を多数回収できたのは、大きな成果であった。また、ウルシ属の果実の出土が多かったことは特筆すべきである。

堅果類遺存体の出土量の多さは、年代測定にも大きな影響をもたらす。樹木には年輪が形成されることから、いわゆる炭化材片では、樹齢が高い木の破片の放射性年代測定値が必ずしも伐採年を反映するとは限らない。これに対し、一年ごとに結実する堅果類の試料は、年代測定試料として適している。各遺構の覆土から得られた堅果類を中心に、AMS年代測定を行なった結果についても、別途、学術論文として報告する予定である。

植物珪酸体分析、土壌微細形態学分析については現在分析中であり、後日報告の予定である。また、残存脂質分析については、ブラッドフォード大学のカール・ヘロン教授とヨーク大学のオリバー・クレイグ博士に委託したが、残念ながら、近年に生じたと考えられる試料汚染が著しく、分析結果の解釈は不可との報告を受けた。

1号貯蔵穴と2号貯蔵穴の覆土には、焼土ブロックや炭化物を多量に含む層が複数認められた。したがって、これらの遺構については、貯蔵穴としての機能が終わったのちに、住居址床面などを清掃した土砂を廃棄するゴミ捨て場として再利用されたことが推測される。

青森県内における円筒式期の遺跡は、一般に土器の出土量の多さで知られているが、本遺跡から出土した土器は、発掘面積の狭さを考慮しても少量であった。特に、石器類については、写真52に示した5点を除いては、特記すべきものはなかった。このような遺物量の少なさが

ら考えて、本遺跡の機能が通年の居住本拠地ではなく、季節的居住地であった可能性も考慮に入れる必要がある。最終的に、遺跡の居住に断続があったのかについて、今回の発掘成果のみに基づいて推測することは困難であり、今後、周辺の遺跡分布や遺跡ごとの石器組成、動植物遺存体の検討も含めた総合的なセトルメント・パターンの検討が必要である。

今回の発掘の目的は研究だけではない。カリフォルニア大学バークリー校の学生を中心とする北米の大学生・大学院生に、遺構の発掘と実測の基礎を実習する機会を提供することも、重要な目標のひとつであった。発掘の参加者は、調査区域の草刈り・表土剥ぎから、遺構の認定、遺構の平面図・断面図の実測、トータル・ステーションを用いた遺物の出土地点の記録、土壌サンプルの採取とそのフローテーション、写真の撮影、そして調査終了時の発掘区域の埋め戻しを含む発掘調査の一連の流れを学ぶ機会を得た。加えて、参加者の大多数は英語を母語とする学生であったため、異なる文化や言葉の中で暮らすこと自体が貴重な経験となった。調査補助員として参加してくれた日本側の学生・大学院生諸氏にとっても、海外からの学生たちとの交流から得たものは多かったと思う。今回の発掘調査が、これからの考古学の国際交流の糸口となれば幸いである。

Summary

Located on the premises of the Aomori Horse Riding Club leased from Aomori City, the Goshizawa Matsumori No. 4 site is a Jomon period residential site. The site was initially discovered by a member of the Riding Club during construction of a small kitchen garden. Our excavation lasted for three field seasons (summers 2008, 2009, and 2010), and the excavation area measured a total of 42 m². Our research efforts focused on a Jomon period pit-dwelling (House No. 1) and three flask-shaped pits (Storage Pits Nos. 1 to 3), all of which were associated with Lower-Ento-d₂ (the end of the Early Jomon) and Upper Ento-a (the beginning of the Middle Jomon) pottery. A historic Heian period pit-dwelling (House No. 2) was also excavated. For each feature, soil samples were collected for flotation from 25 x 25 x 5 cm units, from which charred macro plant remains were retrieved. Identified plant remains include lacquer tree (*Toxicodendron*), dogwood (*Cornus*), Japanese Angelica-tree (*Aralia*), elderberry (*Sambucus*), and knotweed (Polygonaceae). Logistical assistance and moral support from many local archaeologists and other stakeholders were key to the success of our excavation.

写真図版



写真1 2008年調査終了時の合子沢松森(4)遺跡



写真2 2009年調査終了時の合子沢松森(4)遺跡

合子沢松森（4）遺跡



写真3 2010年調査終了時の合子沢松森（4）遺跡



写真4 合子沢松森（4）遺跡調査風景（2008年）



写真5 合子沢松森（4）遺跡調査風景（2009年）



写真6 合子沢松森（4）遺跡調査風景（2010年）



写真7 2008年調査参加者集合写真



写真8 2009年調査参加者集合写真



写真9 2010年調査参加者集合写真



写真10 フローテーション作業



写真 11 2008 年発掘開始時の遺構確認状況（1号住居址）



写真 12 遺構確認面



写真 13 1号住居址東西セクション北から



写真 14 1号住居址南北セクション西から（北半部）



写真 15 1号住居址南北セクション西から（南半部）



写真16 1号住居址



写真17 炉



写真 18 炉及び特殊遺構



写真 19 遺物集中



写真 20 1号土坑東西セクション南から



写真 21 2008年調査時の1号貯蔵穴



写真 22 1号貯蔵穴（平面）



写真 23 1号貯蔵穴南北セクション東から



写真 24 2号貯蔵穴（平面）



写真 25 2号貯蔵穴南北セクション西から



写真 26 2号貯蔵穴



写真 27 2号貯蔵穴出土土器



写真 28 3号貯蔵穴東西セクション南から



写真 29 2号住居址（平面）



写真30 2号住居址南北セクション西から



写真31 1号住居址出土土器 1

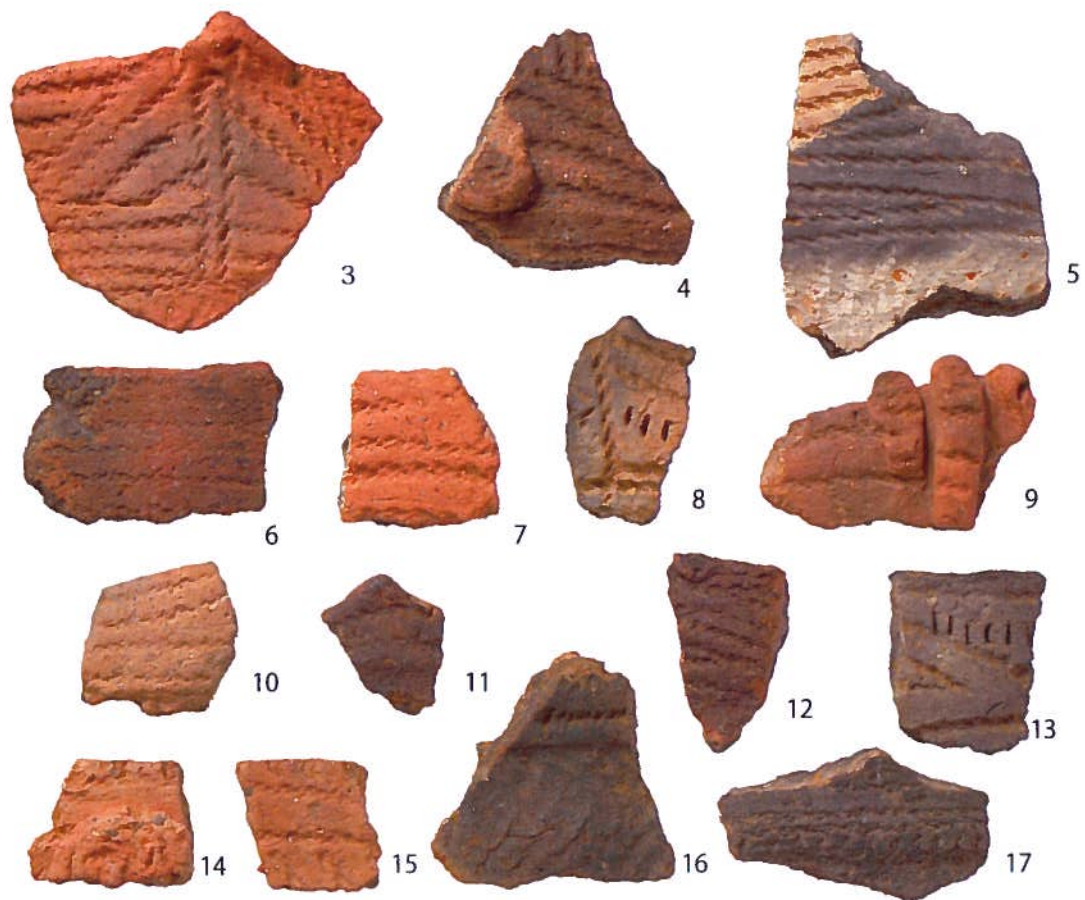


写真 32 1号住居址出土土器 2

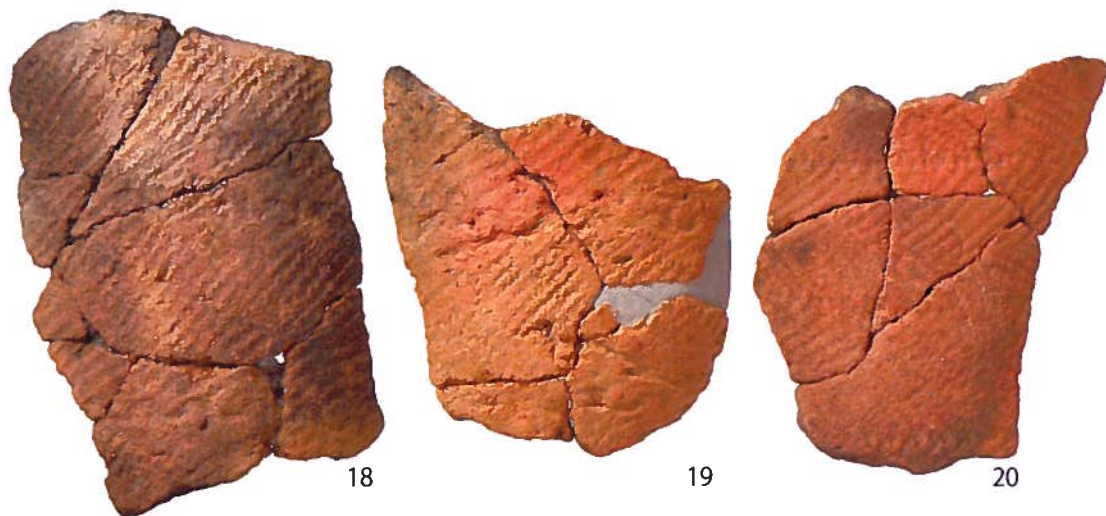


写真 33 1号住居址出土土器 3

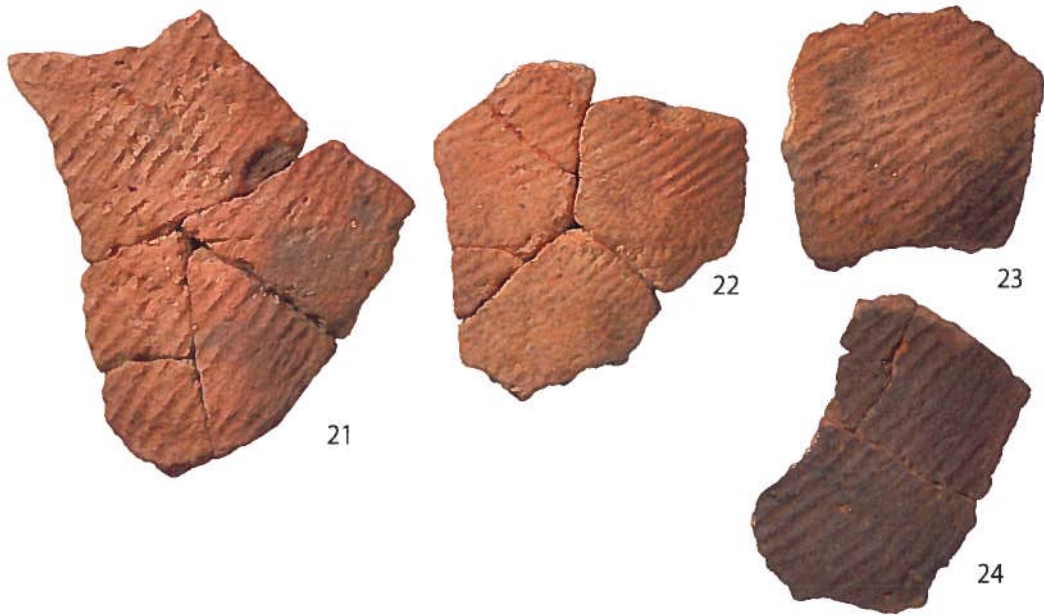


写真 34 1号住居址出土土器 4

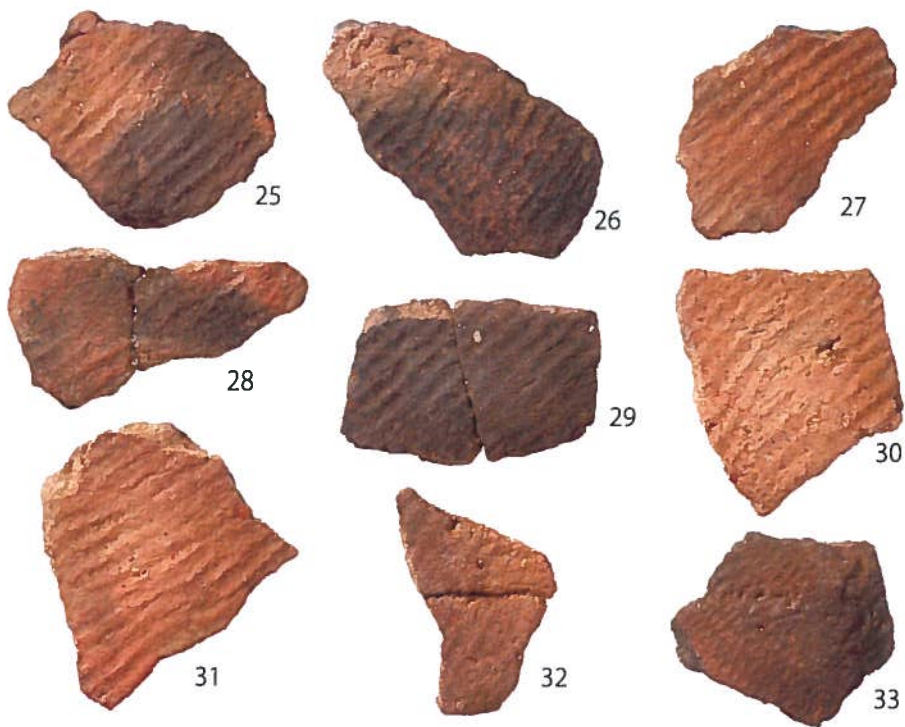


写真 35 1号住居址出土土器 5

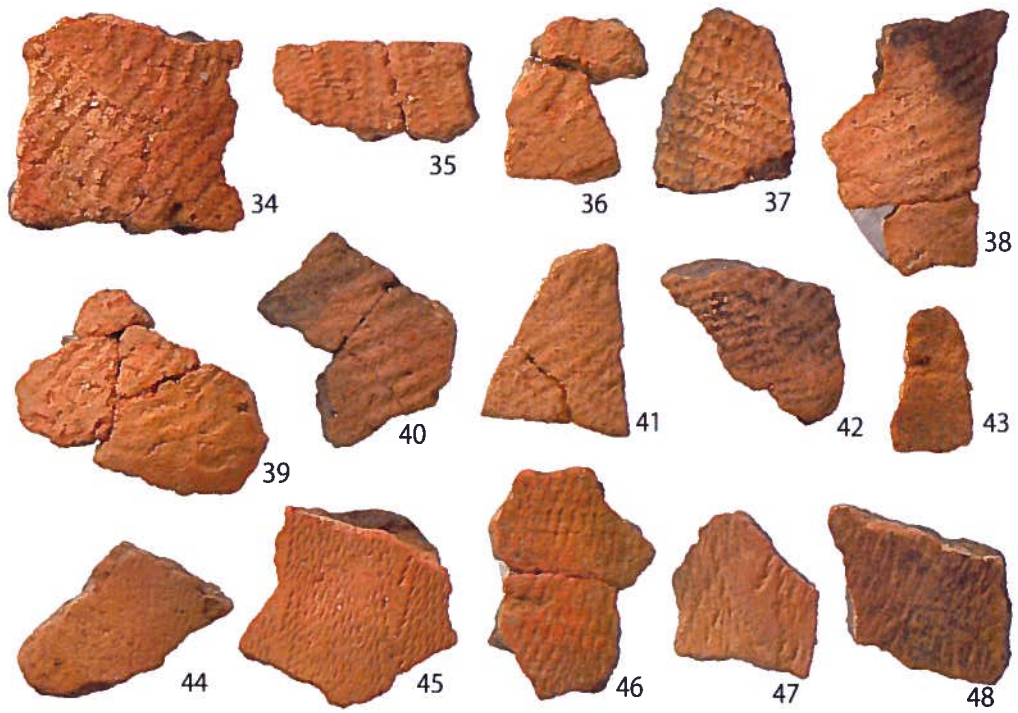


写真 36 1号住居址出土土器 6



写真 37 1号住居址出土土器 7



写真 38 1号住居址出土土器 8

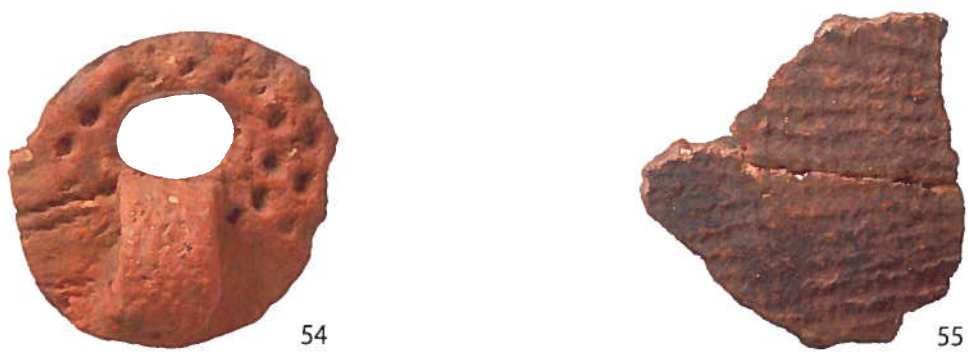


写真 39 1号住居址出土土製品

写真 40 1号住居址柱穴出土土器



写真 41 遺物集中出土土器 1



写真 42 遺物集中出土土器 2

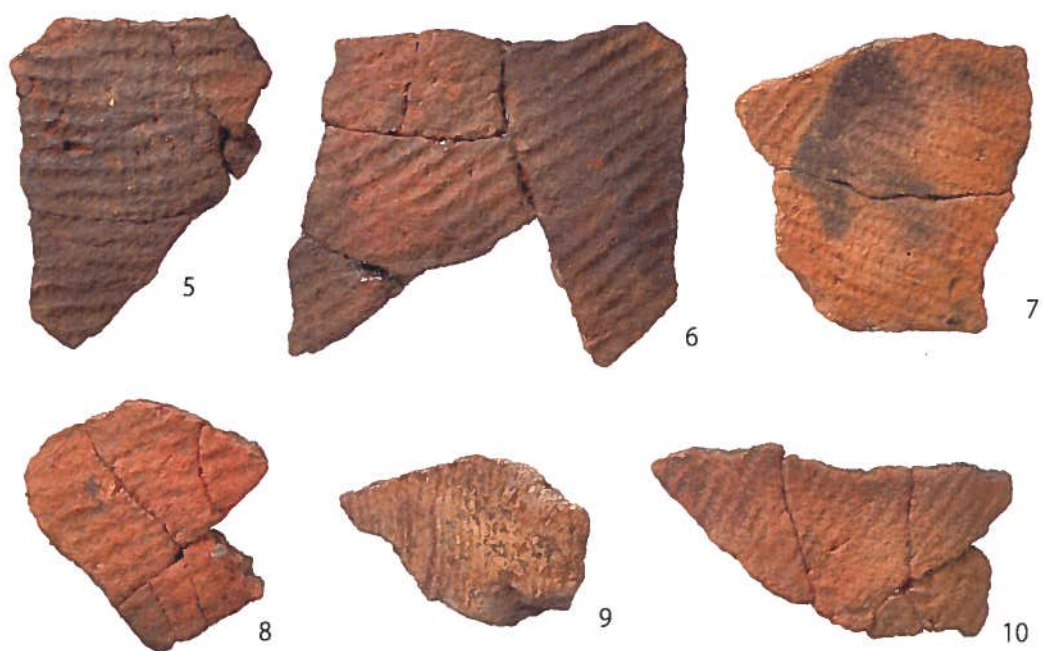


写真 43 遺物集中出土土器 3



写真 44 1号土坑出土土器

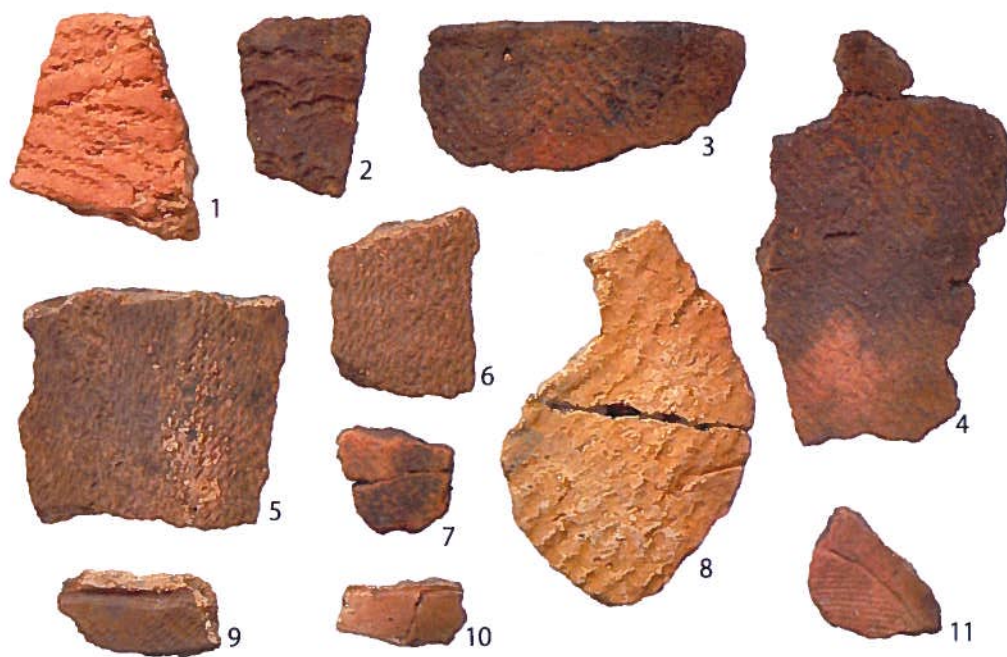


写真 45 1号貯蔵穴出土土器



写真 46 2号貯蔵穴出土土器 1

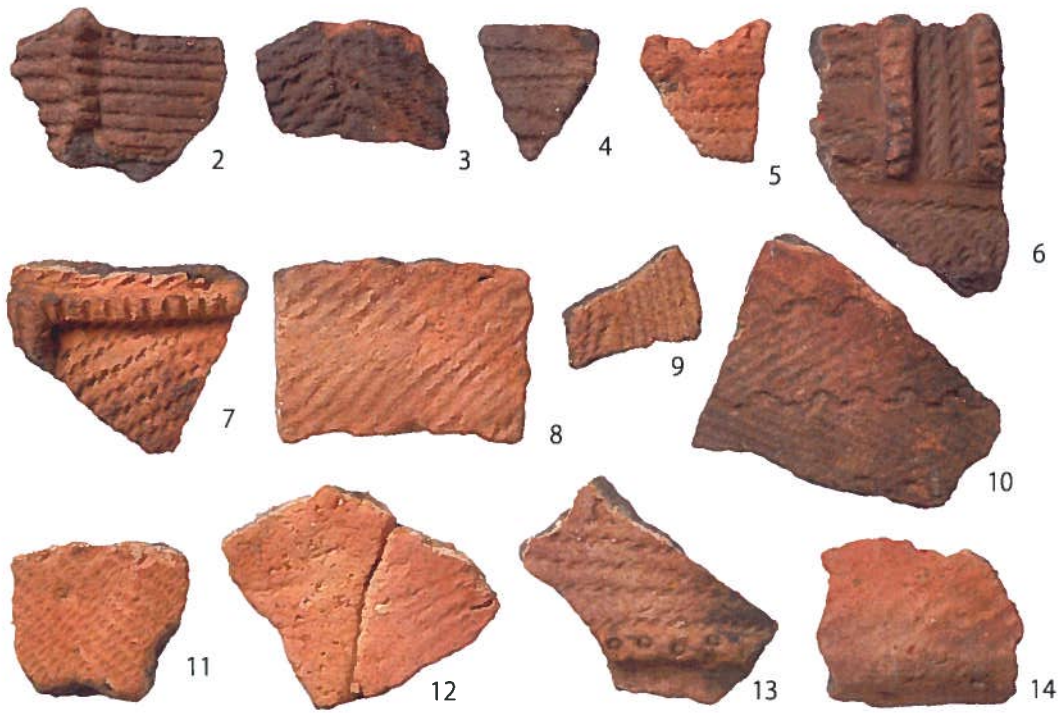


写真 47 2号貯蔵穴出土土器 2

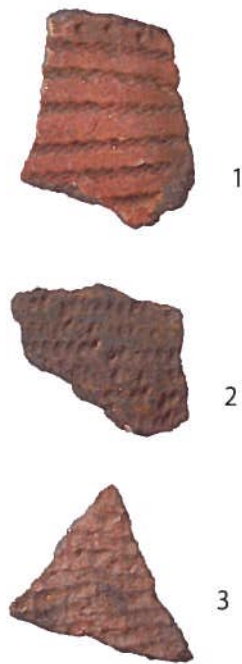


写真 48 3号貯蔵穴出土土器

合子沢松森（4）遺跡

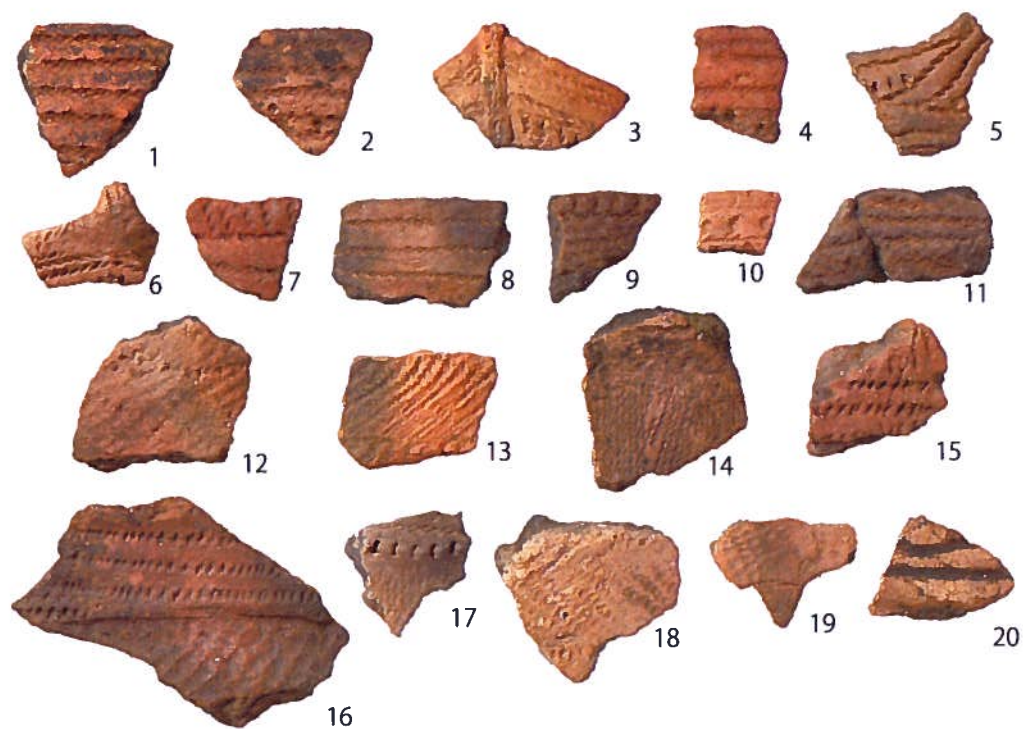


写真 49 遺構外出土縄文時代土器



写真 50 2号住居址出土縄文時代土器



写真 51 2号住居址出土平安時代土器・遺構外（下段左二点）出土平安時代土器

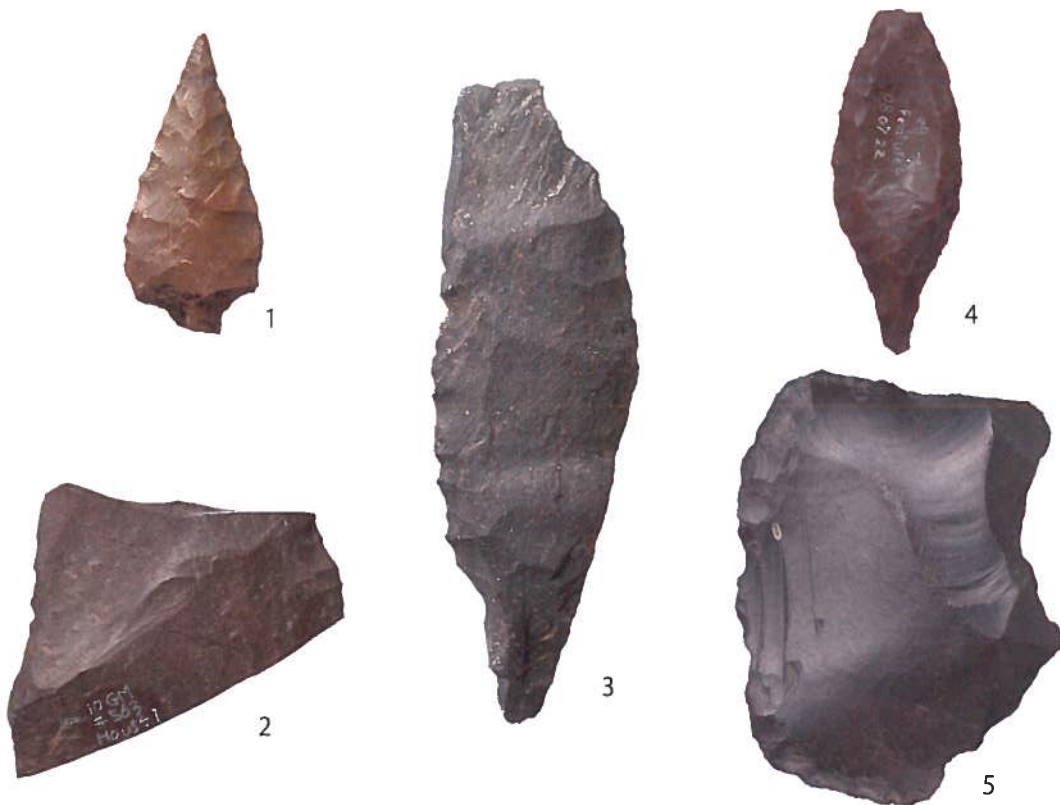


写真 52 1号住居址（1～3）・2号住居址（4）・遺構外（5）出土石器

合子沢松森（4）遺跡

報告書抄録

| ふりがな | ごうしざわまつもりかっこよんいせき | | | | | | | |
|----------------|---|----------|--------|--|--------------------|---|------------------------|------|
| 書名 | 合子沢松森（4）遺跡 | | | | | | | |
| 編者名 | 羽生淳子、伊藤由美子、安達香織 | | | | | | | |
| 発行 | 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」プロジェクト | | | | | | | |
| 所在地 | 〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2016年3月23日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 世界測地系 | | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| ごうしざわまつもりかっこよん | あおもりけんあおもりしおほあざごうしざわあざまつもり | | | | | 20080707～ 20080812 20090710～ 20090812 20100716～ 20100812 | 42 | 学術調査 |
| 合子沢松森（4） | 青森県青森市大字合子沢字松森 | 02201 | 201327 | 40° 45′ 13″ | 140° 45′ 21″ | | | |
| 所蔵遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 合子沢松森（4） | 集落地他 | 縄文 平安 | | 竪穴住居址 (2) 貯蔵穴(3) 土坑(1) 遺物集中(1) | | 縄文土器 石器 土製品 土師器 須恵器 植物遺存体 | | |

青森市
合子沢松森（4）遺跡
—2008・2009・2010年度発掘調査報告書—

2016年3月23日

編集 羽生淳子・伊藤由美子・安達香織

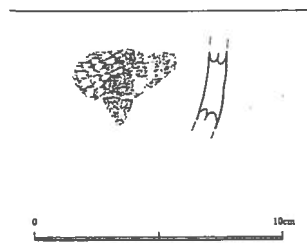
発行 大学共同利用法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所
「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性」プロジェクト
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
TEL 075-707-2100

印刷 中西印刷株式会社

ISBN 978-4-906888-23-8

- ・18頁 図7-1 (誤) 縮尺 1/3 (正) 縮尺 1/4
- ・20頁 図9-49 (誤) 縮尺 1/3 (正) 縮尺 1/4
- ・33頁 図17-1 (誤) 縮尺 1/3 (正) 縮尺 1/4
- ・36頁 図20-9 (誤) 縮尺 1/3 (正) 縮尺 43%
- 図20-10 (誤) 縮尺 1/3 (正) 縮尺 50%

図20-19 下記を貼り込んでください



- ・10・11頁 図4 調査区 東壁 断面図 A-A' レベル
(誤) 95.400m (正) 95.500m

- 調査区 南壁 断面図 B-B' レベル
(誤) 95.400m (正) 95.800m

